福島県文化財調査報告書第431集

こまちダム遺跡発掘調査報告4

沢目木B遺跡

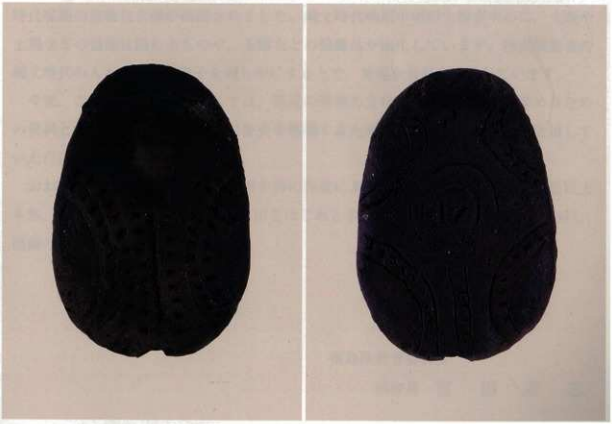
2006年3月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
福島県土木部

こまちダム遺跡発掘調査報告4

沢目木（さわめき）B遺跡

口絵 1　沢目木B遺跡出土縄文土器



口絵 2　沢目木B遺跡出土土版

序　　文

福島県の多目的ダムであるこまちダムは，田村郡小野町を流れる夏井川支流の黒森川流域の菖蒲谷地内に建設が計画され，現在，工事が進行中です。

このダムの水没予定地内及び県道付替予定地には，先人が残した貴重な埋蔵文化財が所在し，表面調査の結果，数多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されました。

埋蔵文化財は，地域の長い歴史の中で育まれた文化的遺産であると同時に，わが国の歴史や文化の正しい理解と，将来における文化の向上発展の基礎をなすものであります。

このため，福島県教育委員会では，福島県土木部河川港湾領域及び県中建設事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね，平成11年度には県道付替え予定地の表面調査，平成12年度からは試掘調査を実施し，現状保存が困難な遺跡については，記録として保存することとし，平成14年度からは発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成17年度に実施した沢目木B遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。この沢目木B遺跡は，黒森川南岸の丘陵と沢部を含む低地に位置しており，縄文時代晩期の遺物包含層が確認されました。縄文時代晩期中頃の土器を中心に，土版や土偶などの信仰に関わるものや，玉類などの装飾品が出土しています。阿武隈高地の縄文時代の人々の生活の様子を明らかにする上で，重要な資料を提供しています。

今後，この報告書につきましては，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるための資料として，さらには，地域の歴史を解明するための生涯学習資料として活用していただければ幸いに存じます。

おわりに，発掘調査の実施から報告書の作成にあたり，御協力いただいた福島県土木部，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成18年３月

福島県教育委員会

教育長　富　田　孝　志

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会から委託を受け，県内の大規模な開発に先立ち，埋蔵文化財の調査を行っております。小野町のこまちダム建設に関連する埋蔵文化財の調査もそのひとつであり，平成14年度より本格的な発掘調査を開始いたしました。

この報告書は，平成17年度に発掘調査を実施した沢目木Ｂ遺跡の調査成果をまとめたもので，この調査でこまちダム関連の埋蔵文化財の調査は終了となります。

沢目木Ｂ遺跡は，約１万３千年前から１万年続いた縄文時代の終わりごろの晩期と呼ばれる時期の遺跡です。遺跡の所在する丘陵裾部の東斜面からは，この時期の大洞C_2式土器を主体とした遺物の捨て場が確認され，１万点を超す縄文土器片，石器が出土しています。多くの土器が当時の姿のままに復元され，阿武隈高地中部地域におけるこの時期の土器の作り方や使い方などの特徴をよく示す資料となりました。

この報告書を，郷土の歴史を学ぶ基礎資料として，広く役立てていただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました関係諸機関並びに地元の方々に深く感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人福島県文化振興事業団

理事長　高　城　俊　春

緒　　言

1　本書は，平成17年度に実施したこまちダム関連遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書には次に記す遺跡の調査成果を収録した。

沢目木B遺跡　　福島県田村郡小野町大字雁股田字沢目木　　遺跡番号52200146

3　本発掘調査事業は，福島県教育委員会が福島県土木部の委託を受けて実施し，調査・報告にかかる費用は福島県土木部が負担した。

4　福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の以下の職員を配置して調査にあたった。

文化財副主査　山元　出

さらに，文化財主査　山岸英夫，文化財主査　宮田安志，文化財主査　今野　徹，文化財副主査　福田秀生の協力を得ている。

6　本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院の承認を得て，同院発行の２万５千分の１地形図を複製したものである。(承認番号　平17東複第333号)

7　石器の実測・トレース・レイアウトの一部は，株式会社ラングに委託し，その成果を収録した。

8　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

9　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関・諸氏から御協力・御助言をいただいた。(順不同・敬称略)

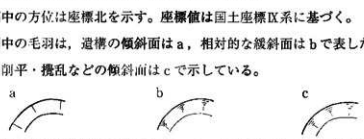
小野町　小野町教育委員会　藤沼邦彦

用　　例

1　本書における地形図・遺構図の用例は，以下の通りである。

方位・座標　図中の方位は座標北を示す。座標値は国土座標Ⅸ系に基づく。

毛　　羽　図中の毛羽は，遺構の傾斜面はa，相対的な緩斜面はbで表した。後世の人為的な削平・攪乱などの傾斜面はcで示している。



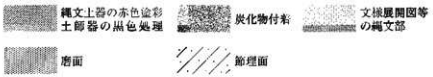
土　　層　遺跡内の標準堆積土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせて表記した。土色およびその記号は『新版標準土色帖』に基づく。

標　　高　断面図中の高さは，標高を示す。

縮　　尺　各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。

2　本書における遺物図の用例は，以下の通りである。

網　　点　図中の網点は以下を示す。



土器断面　須恵器は黒ベタ，繊維土器は▲で示した。粘土積み上げ痕は1点鎖線で示した。

縮　　尺　各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。

番　　号　遺物の番号は挿図ごとの通し番号とする。写真図版中の遺物番号は，本文中の「挿図番号」－「枝番号」を示す。本文中の写真図版番号は図版「番号」のように示した。

出土位置　遺物番号横の（　）に出土グリッド・層位を表記した。

計測値　遺物の計測値については，推定値を（　），残存値を［　］で示した。

4　本書および調査で使用した略号は以下の通りである。

小野町…ON　沢目木B遺跡…SMK・B　グリッド…G　遺物包含層…SH

住居跡…SI　掘立柱建物跡…SB　土器埋設遺構…SM　土坑…SK

5　参考・引用文献は執筆者の敬称を略し，巻末にまとめて収めた。

目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　事業の概要と経緯 …… 1

第２節　地理的環境 …… 4

第３節　歴史的環境 …… 6

第４節　遺跡の位置と地形 …… 10

第５節　調査の方法と経過 …… 11

第２章　調査の成果

第１節　遺構の分布と基本土層 …… 13

第２節　遺物包含層 …… 16

1．概　　要 …… 16

2．出土土器 …… 19

3．出土土製品 …… 32

4．出土石器 …… 38

5．出土石製品 …… 42

第３節　沢　　跡 …… 43

1．概　　要 …… 43

2．出土遺物 …… 43

第４節　遺構外出土遺物 …… 47

第３章　ま　と　め

第１節　沢目木Ｂ遺跡出土遺物の特徴 …… 50

1．出土土器の概要 …… 50

2．大洞C_2式期土器について …… 51

3．石器・石製品について …… 55

4．ま　と　め …… 55

第２節　沢目木Ｂ遺跡の総括 …… 56

1．地形の変遷 …… 56

2．遺跡の形成 …… 56

3．ま　と　め …… 58

第３節　こまちダム遺跡発掘調査の総括 …… 58

1．各遺跡の立地 …… 58

2．各時期の様相 …… 59

挿図・表・写真図版目次

[挿図]

図1　こまちダム位置図 …… 1
図2　ダム工事計画と遺跡 …… 2
図3　周辺表層地質図 …… 5
図4　周辺遺跡位置図 …… 8
図5　調査区周辺地形図 …… 11
図6　調査区全体図 …… 14
図7　基本土層図 …… 15
図8　遺物包含層，遺物出土点数 …… 17
図9　遺物包含層南半LⅣ上面
遺物出土状況図 …… 18
図10　遺物包含層出土土器（1） …… 23
図11　遺物包含層出土土器（2） …… 24
図12　遺物包含層出土土器（3） …… 25
図13　遺物包含層出土土器（4） …… 26
図14　遺物包含層出土土器（5） …… 27
図15　遺物包含層出土土器（6） …… 28
図16　遺物包含層出土土器（7） …… 29
図17　遺物包含層出土土器（8） …… 30
図18　遺物包含層出土土器（9） …… 33
図19　遺物包含層出土土器（10） …… 34
図20　遺物包含層出土土器（11） …… 35
図21　遺物包含層出土土器（12） …… 36
図22　遺物包含層出土土製品 …… 37
図23　遺物包含層出土石器（1） …… 39
図24　遺物包含層出土石器（2） …… 40
図25　遺物包含層出土石器（3） …… 41
図26　遺物包含層出土石器・石製品 …… 42
図27　沢跡出土土器（1） …… 44
図28　沢跡出土土器（2） …… 45
図29　沢跡出土石器・石製品 …… 46
図30　遺構外出土土器 …… 48
図31　遺構外出土石器 …… 49
図32　沢目木B遺跡出土土器集成図（1） …… 52
図33　沢目木B遺跡出土土器集成図（2） …… 53
図34　西田H・沢目木B遺跡
晩期遺構配置図 …… 57

[表]

表1　こまちダム遺跡一覧 …… 3
表2　周辺遺跡一覧 …… 9
表3　遺物包含層出土縄文土器時期別重量 …… 17
表4　出土石器器種別点数 …… 55
表5　黒森川流域の遺跡時期一覧 …… 59

[写真図版]

口絵1　沢目木B遺跡出土縄文土器
口絵2　沢目木B遺跡出土土版
1　調査前遠景 …… 65
2　調査前近景 …… 65
3　調査区全景 …… 66
4　基本土層 …… 66
5　遺物包含層検出状況 …… 67
6　遺物包含層F3グリッド土層 …… 67
7　遺物包含層F2グリッド土層 …… 68
8　遺物包含層完掘状況 …… 68
9　遺物出土状況 …… 69
10　出土土器（1） …… 70
11　出土土器（2） …… 71
12　出土土器（3） …… 72
13　出土土器（4） …… 73
14　出土土器（5） …… 74
15　出土土器（6） …… 75
16　出土土器（7） …… 76
17　出土土器（8） …… 77
18　出土土器・土製品 …… 78
19　出土石器 …… 79
20　出土石器・石製品 …… 80
21　土器細部（1） …… 81
22　土器細部（2） …… 82

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　事業の概要と経緯

こまちダムは，福島県が田村郡小野町大字苅藻谷地内に建設中のダムである。重力式コンクリートダム方式を採用し，堤高37m，総貯水量770,000㎥，集水総面積４㎢の規模を持つ。二級河川夏井川水系に属する黒森川の洪水対策，流水の正常な機能の維持，水道用水の確保などを目的とした多目的ダムである。平成17年度中に堤体および県道付け替えなどの工事が完成し，試験湛水開始の予定である。

こまちダム関連の埋蔵文化財の調査は，平成10年度から開始された。この年に小野町教育委員会が主体となって水没地帯15ha分の表面調査を実施しており，周知の堂田遺跡および新発見の西田Ａ～Ｇ遺跡を確認している（小野町教育委員会1998）。

その後は福島県教育委員会が主体となり，平成11年度にはダム湖を周回する県道矢吹・小野線付け替え予定路線区間20haの表面調査を実施し，新発見４遺跡，および地形的条件から遺跡の可能性が高く，試掘・確認調査を要する「遺跡推定地」９箇所を確認した（福島県教育委員会2000）。

平成12年度は，遺跡推定地７箇所の試掘・確認調査と水没地帯20haについての再確認を含めた表面調査を実施した。表面調査では遺跡推定地５箇所を新たに確認し，試掘・確認調査ではＢ６・９地点の２箇所で遺構・遺物を検出している。Ｂ６では縄文時代・平安時代の集落跡が確認され，要保存面積1,300㎡が確定し，堂田Ａ遺跡として登録した。Ｂ９では縄文時代前期・晩期の土坑および遺物包含層を検出し，要保存面積1,600㎡が確定し，沢目木遺跡として登録した（福島県教育委員会2001）。

平成13年度は，堂田Ａ遺跡および遺跡推定地５箇所の試掘・確認調査を実施した。併せて工事計画が変更された県道予定路線10haの表面調査を実施し，遺跡推定地１箇所を新たに確認した。堂田Ａ遺跡は県道路線予定地が当初の南側に変更されたため，再度試掘調査を行った。その結果前年度同様縄文時代と平安時代の集落跡を確認し，要保存面積800㎡が確定した。遺跡推定地のうちＢ８では，宅地造成予定地を含め

図１　こまちダム位置図

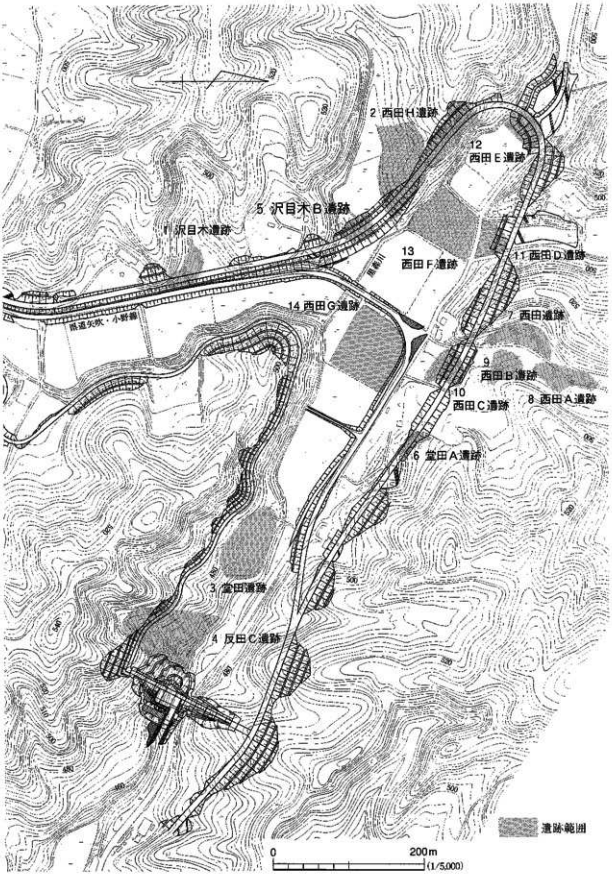


図2　ダム工事計画と遺跡

表1　こまちダム遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	沢目木遺跡	小野町雁殿田字沢目木	縄文早・前・晩期　弥生前期	集落跡・散布地
2	西田H遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文早・前・晩期　奈良・平安	集落跡・狩猟地
3	堂田遺跡	小野町高蒲谷字反田	縄文後・晩期	散布地
4	反田C遺跡	小野町高蒲谷字反田	縄文早・後期	散布地・狩猟地
5	沢目木B遺跡	小野町雁殿田字沢目木	縄文晩期	散布地
6	堂田A遺跡	小野町高蒲谷字堂田	縄文早期・平安	集落跡
7	西田遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文	散布地
8	西田A遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文後・晩期	散布地
9	西田B遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文後・晩期	散布地
10	西田C遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文	散布地
11	西田D遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文	散布地
12	西田E遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文	散布地
13	西田F遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文	散布地
14	西田G遺跡	小野町高蒲谷字西田	縄文	散布地

試掘調査を実施した結果，縄文時代早・前・晩期および平安時代の集落跡を検出し，調査範囲の7,400㎡を要保存範囲として確定し，西田H遺跡として登録した（福島県教育委員会2002）。

平成14年度は，西田A・B・D・E・F・G・H遺跡の7遺跡と遺跡推定地4箇所の試掘・確認調査および沢目木遺跡・西田H遺跡の発掘調査を実施した。試掘調査では西田H遺跡，遺跡推定地B15・16地点の3箇所で遺構・遺物を検出している。西田H遺跡は，県道路線予定地のうち前年度未調査であった部分に対する2次調査で，縄文時代の集落跡が確認され，新たに2,600㎡が追加された。B15では，縄文時代の遺構・遺物を確認し，要保存範囲1,200㎡を反田C遺跡として登録した。B16では低地において縄文時代晩期の遺物が検出され，要保存範囲600㎡を沢目木B遺跡として登録した（福島県教育委員会2003）。これら以外の既登録の遺跡では遺構・遺物がほとんど確認できず，削平などにより消滅してしまったものと考えられる。

沢目木遺跡の発掘調査では，縄文時代早期の竪穴状遺構のほか掘立柱建物跡・土坑が検出され，遺物包含層中からは縄文時代早・前・晩期，弥生時代前期の遺物が出土している。この成果は同年度『こまちダム遺跡発掘調査報告1』としてまとめた（福島県文化振興事業団2003）。西田H遺跡の発掘調査は前年度確定した要保存範囲のうち県道路線予定地の2,700㎡について開始したものの，縄文時代早・晩期，平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・遺物包含層などが重複し，複数の文化面が確認されたため，福島県土木部県中建設事務所・福島県教育委員会・福島県文化振興事業団の3者の協議により，2,150㎡について調査を終了させ，残りは年度当初予定されていた堂田A遺跡の発掘調査とあわせて次年度に繰り延べることとした。

平成15年度は，当初，反田C・沢目木・堂田A・西山H・沢目木B遺跡の5遺跡の発掘調査が予定されていた。うち，沢目木B遺跡については遺跡部分が谷地である上，盛土が厚く，調査に困難が生じるため次年度以降へ繰り延べた。反田C遺跡の発掘調査では，土坑3基を検出した。沢目木遺跡は前年度調査できなかった現有県道下の100㎡に対する調査であり，遺物包含層を確認している。これら2遺跡の成果は同年度に『こまちダム遺跡発掘調査報告2』としてまとめた（福島県文化振興事業団2004）。堂田A遺跡では，平安時代の竪穴住居跡4軒・縄文時代早期の竪穴住居跡15軒・遺

物包含層などを検出した。西田Ｈ遺跡は，前年度未調査範囲および試掘調査によって追加された範囲を含む3,000㎡に対して調査を実施した。縄文時代早・前・晩期の住居跡24軒・遺物包含層などが検出され，前年度調査とあわせ阿武隈高地の縄文時代を考える上で大きな成果が得られた。

平成16年度は，堂田Ａ遺跡・西田Ｈ遺跡の発掘調査報告書作成および試掘調査を行った。試掘調査は，堂田Ａ遺跡については未試掘であった前年度調査範囲西側の宅地部分と南側の湯水線以下の部分に対するものである。要保存範囲が確認されれば発掘調査を行う予定であったが，遺構・遺物は確認できず保存を要さなかった。西田Ｈ遺跡については，沢目木Ｂ遺跡調査のための盛土除去を施工した際に，除外された西田Ｈ・沢目木Ｂ両遺跡間の水田部において遺物の散布が認められたことから再度調査を実施した。結果，沢目木Ｂ遺跡に接する部分で縄文時代晩期の遺物包含層を検出し，要保存範囲500㎡を沢目木Ｂ遺跡に追加して対応することとした（福島県教育委員会2005）。発掘調査報告書については前年度までの調査成果をまとめたもので，平成17年３月に『こまちダム遺跡発掘調査報告３』として刊行した（福島県文化振興事業団2005）。

平成17年度は，沢目木Ｂ遺跡1,100㎡の発掘調査を行った。結果，縄文時代晩期の良好な遺物包含層が確認され，同年度中に成果を本書としてまとめた。これをもって，こまちダム関連の埋蔵文化財調査は終了となった。

第２節　地理的環境

福島県は，阿武隈高地東縁から太平洋に面する「浜通り」，阿武隈高地から奥羽山脈の間の，阿武隈川の形成した平野部分を中心とする「中通り」，奥羽山脈以西の「会津」の３地域に区分される。

こまちダム関連の遺跡が所在する小野町は，阿武隈高地のほぼ中央を占める田村郡に属し，中通りの東縁に位置する。町域は，東を矢大臣山（964m），北西を黒石山（896m）・高柴山（884m），西を一盃山（856m）・日影山（879m），南西を十石山（718m）などの山々で画され，東・南はいわき市，西は郡山市・石川郡平田村と接する。北・東に接する田村郡船引町・大越町・滝根町は平成17年３月にその他同郡２町村と合併し，田村市となっている。町域の中央には，いわき市において太平洋に注ぐ夏井川の支流である右支夏井川が南東へと流れる。これに，北から車川・黒森川・十石川の各支流が東流して右岸より流れ込み，各河川の周囲には，標高500m級の山地性丘陵を開析して，400～450m程度の谷底低地が形成されている。町域の面積は125.11㎢，人口は12,559人である（平成17年３月現在）。

町域の地質は，深成岩類を主な基盤とし，丘陵裾部および谷底低地には未固結の第四紀堆積物が堆積する。深成岩類は，大部分を古期花崗岩類に属する角閃石黒雲母花崗閃緑岩が占め，黒森川中流域，十石川上流域には町域の西縁から新規花崗岩類（灰色黒雲母花崗閃緑岩など）がのびる。第四紀堆積物には，丘陵上には表層の腐植土との漸移層である暗褐色土壌，褐色火山灰層，帯黄褐色火山灰層，谷底低地にはシルト，砂，礫が認められ，これらが花崗岩盤を覆っている（小野町1992）。

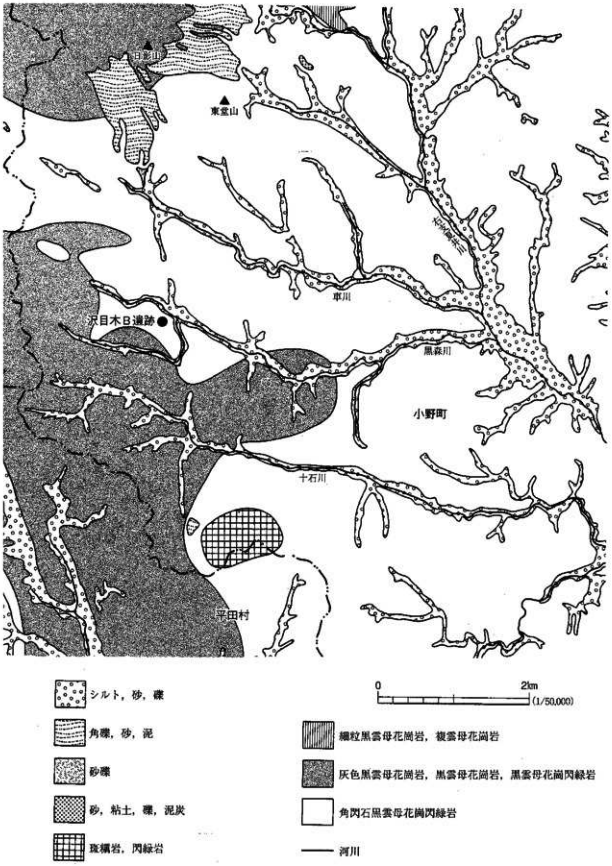


図3　周辺表層地質図　『土地分類基本調査：小野新町』(福島県農林水産部農地計画課1996)を基に作成

小野町の現在の気候は，阿武隈高地の中央という立地から気温の年較差・日較差の大きい内陸盆地的な特徴を示す。しかし，標高400m台の高原地帯に位置していることから年平均気温が10.3℃と高くなく，真夏日は少なく冬日が多い比較的冷涼な気候である。また，中通り地方の東縁ということもあり，内陸・太平洋双方の影響を受け，天候の変化も激しい。平年の年間降水量は1,232㎜で，冬季の降雪量は多くない。植生は，山地にミズナラ林，丘陵・平地にコナラ林が認められ，冷温帯夏緑広葉樹林と暖温帯広葉樹林の推移地帯に位置する。また，丘陵・平地には植林によるスギ林も多く認められる（小野町1992）。

小野町の中心市街地は，右支夏井川と車川・黒森川の合流点付近の低地に位置する小野新町地区で，磐越自動車道，国道349号線，ＪＲ磐越東線が右支夏井川の形成する低地に沿って走り，小野ＩＣや小野新町駅が設けられている。こまちダムが建設される菖蒲谷・雁股田地区は，小野町の西部に位置し，菖蒲谷は黒森川の中流域，雁股田は黒森川上流域から十石川上流域にあたる。地区内には小野新町から黒森川沿岸を通り十石川上流域を抜けて平田村蓬田地区へと向かう県道矢吹・小野線が走っている。周辺の地形は山地性の丘陵と黒森・十石両河川の形成した谷底低地およびその支谷で構成される。丘陵部はスギを主体とする山林，その裾部・谷底の低地は集落および田畑として利用され，定型的な山間の農村風景を見せている。

第３節　歴史的環境

『福島県遺跡地図（中通り）』によると，小野町内には117遺跡が登録されている（福島県教育委員会1996）。特に平成４・５年度（1992・1993年）には，東北横断道（磐越自動車道）により町域中央部の10遺跡が発掘調査されている。その後，福島空港・あぶくま南道路（あぶくま高原道路），こまちダム建設関連の分布調査により黒森川流域において29遺跡が確認され，うち12遺跡の発掘調査が行われている。この他に小野町教育委員会によって２遺跡が新たに追加されている。

町内では，旧石器時代の遺構・遺物は確認できていない。縄文時代草創期についても，猪久保城から御子柴型尖頭器が確認されている程度である。

縄文時代早期になると丘陵部において遺跡数が爆発的に増加し，特に，こまちダム関連の調査で大きな成果が得られている。本遺跡に隣接する西田日遺跡では，早期のほぼ全時期に亘る集落と良好な遺物包含層が検出されている。また，南に隣接する沢目木遺跡では，前葉の撚糸文系土器末期の無文土器を伴う竪穴状遺構が検出されている。対岸の堂田Ａ遺跡では，中葉～後葉および末葉の常世１式・槻木１式・大畑Ｇ式期の竪穴住居跡が検出されている。その他の調査でも，早期前葉においては小滝遺跡・鴨ヶ館跡では稲荷台式，柳作Ｂ遺跡では日計型押型文土器が出土している。中葉では，長久保遺跡で初期沈線文，小滝・糀内・柳作Ｂ遺跡・鴨ヶ館跡で田戸下層式や常世１式などが出土している。後葉では，鍛冶久保・本飯豊遺跡で茅山下層式期，仁井殿遺跡・鴨ヶ館跡で大畑Ｇ式期の竪穴住居跡を検出している。また，鴨ヶ館跡・糀内・鍛冶久保遺跡では早期と考えられ

る落し穴状土坑が検出されている。

縄文時代前期における遺跡の分布も丘陵部に多いと言える。前期初頭においては，西田Ｈ遺跡および鴨ヶ館跡・小滝遺跡で日向前Ｂ式～花積下層式土器が確認されている。前期前葉から中葉でも西田Ｈ遺跡で関山Ⅱ式期・大木２ａ式期の集落が確認されているほか，小滝・沢目木遺跡で大木２ｂ式土器が出土している。後葉から末葉では東北系土器と関東系土器が伴出する傾向が強く，柳作Ｂ遺跡で大木３式期の住居跡から浮島Ⅰａ式が伴出している。また，沢目木・小滝遺跡などでも大木４・６式，浮島式，諸磯ｂ式が出土している。

縄文時代中期では，矢大臣山（新田）遺跡での調査が代表的で，大木８ａ式期・大木９・10式期の竪穴住居跡と遺物包含層が確認されている。その他では，菖蒲谷の反田Ｂ遺跡で大木９式期の土器埋設遺構が確認されている。雁脛田の堀切遺跡では大木８ａ～８ｂ式期の完形品を含む土器が採集され，石囲炉も確認されている。

縄文時代後・晩期においては遺跡数が減少する。後期では，矢大臣遺跡において綱取Ⅰ・Ⅱ式期の竪穴住居跡・配石遺構が確認されているほか，鴨ヶ館跡で加曽利Ｂ式土器，長久保遺跡で瘤付土器，土偶が出土している。晩期では，西田Ｈ遺跡で大洞C_2式期の竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土器埋設遺構などを確認しており，反田Ｂ遺跡でも同時期の竪穴住居跡が検出されている。その他，権ノ木畑遺跡では土器埋設遺構が検出されている。

弥生時代の遺跡では，明確な集落が確認できない。沢目木・西田Ｈ遺跡で前期の御代田式にかかる土器とこの時期と想定される住居跡および建物跡が確認されているが確実ではない。中期では鴨ヶ館跡で龍門寺式から天神原式期にかかる土器片が出土している。また，万景Ｂ遺跡では石包丁と籾圧痕付の土器片が出土している。

古墳時代の遺跡には，落合・安橋・本飯豊・万景Ｅ遺跡などの集落遺跡および大豆柄古墳群がある。大豆柄古墳群は前期に比定される円墳群によって構成される。その南方には同じく前期に属する大集落を検出した落合遺跡が所在する。同古墳群の北方には後期に属する本飯豊遺跡が所在し，竪穴住居跡，畑跡や土器・石製模造品・鉄鏃などが出土している。安橋遺跡では中期の石製有孔円盤や土製丸玉が採集されており，祭祀に関連するものである可能性が考えられる。

奈良・平安時代においては，『和名類聚抄』によれば，現在の田村郡は陸奥国安積郡に属していたとされ，同郡内八郷のうち小野郷が小野町周辺にあたると推定されている。調査された遺跡では，落合・本飯豊遺跡で古墳時代から継続して集落が営まれている。そのほかでは，糀内・作田Ｂ遺跡では奈良～平安時代と継続して集落が営まれ，鍛冶久保遺跡・猪久保城跡・北の内遺跡・滝遺跡・小滝遺跡などでは平安時代に１～３軒程度の小集落が営まれている。近年調査の進んだ黒森川流域に限れば，柳作Ａ・Ｃ遺跡・鹿島遺跡・西田Ｈ遺跡・堂田Ａ遺跡で小規模な集落が検出されており，いずれも奈良時代末～平安時代初期の間に収まる。

中世においては，南北朝初期にあたる建武２年の陸奥国守北畠顕家が結城親朝にあてた陸奥国宣案に「小野保」として記録に初めて登場する。記録はないものの，小野保は平安時代末期には安積

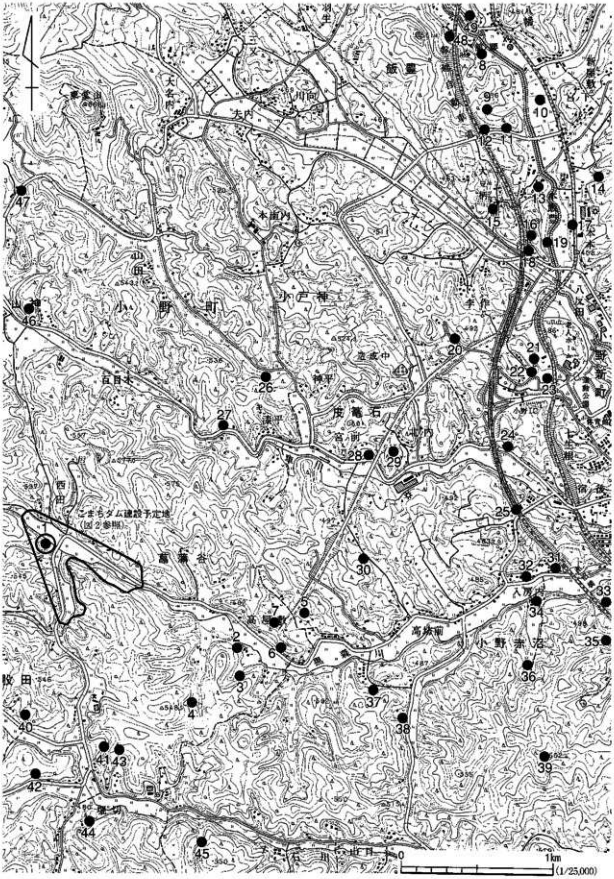


図4　周辺遺跡位置図

表2　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	沢目木B遺跡	小野町雁股田字沢目木	縄文	散布地
2	反田遺跡	小野町菖蒲谷字反田・鹿島	縄文	散布地
3	鹿島遺跡	小野町菖蒲谷字鹿島	縄文・平安・中世	集落跡
4	反田B遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文	集落跡
5	柳作A遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安	集落跡
6	柳作B遺跡	小野町菖蒲谷字柳作	縄文・近世	集落跡
7	柳作C遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安・近世	集落跡
8	寺ノ下遺跡	小野町飯豊字寺ノ下	縄文・奈良・平安・近世	散布地
9	前久保遺跡	小野町飯豊字河沼・寺ノ下	縄文・古墳～平安	散布地
10	柿入遺跡	小野町飯豊字柿入	古墳～平安	散布地
11	作田A遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
12	作田B遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
13	本飯豊遺跡	小野町飯豊字本飯豊	奈良・平安・近世	集落跡・墓跡
14	一盃森遺跡	小野町飯豊字一盃森	奈良・平安	散布地
15	月清水遺跡	小野町飯豊字大豆柄	奈良・平安	散布地
16	大豆柄古墳群	小野町飯豊字大豆柄	古墳	古墳
17	二本木遺跡	小野町飯豊字二本木	古墳～平安	散布地
18	落合遺跡	小野町飯豊字落合	古墳～平安	集落跡
19	馬ノ本遺跡	小野町飯豊字馬ノ本	奈良・平安	散布地
20	李作遺跡	小野町皮籠石字李作	奈良・平安	散布地
21	馬番遺跡	小野町小野新町字馬番・七生根	奈良・平安	散布地
22	西馬番遺跡	小野町小野新町字西馬番	奈良・平安	散布地
23	七生根遺跡	小野町小野新町七生根	奈良・平安	散布地
24	裁内遺跡	小野町皮籠石字裁内	奈良・平安	集落跡
25	五百成遺跡	小野町皮籠石字五百成	奈良・平安	散布地
26	神平遺跡	小野町皮籠石字神平	縄文	散布地
27	古防遺跡	小野町皮籠石字古防	縄文・奈良・平安	散布地
28	宮ノ前遺跡	小野町皮籠石字宮ノ前	古墳～平安	散布地
29	北ノ内遺跡	小野町皮籠石字北ノ内	平安・近世	集落跡
30	四郎坊遺跡	小野町小野赤沼字四郎坊	奈良・平安	散布地
31	関根前遺跡	小野町小野赤沼字関根前	奈良・平安	散布地
32	石崎遺跡	小野町小野赤沼字西ノ内	奈良・平安	散布地
33	西作遺跡	小野町小野赤沼字西作	奈良・平安	散布地
34	無量寺阿弥陀堂	小野町小野赤沼字入房内	平安	
35	猪久保城跡	小野町谷津作字和久・猪久保	縄文・弥生・奈良～中世	城館跡
36	入房内遺跡	小野町小野赤沼字坊入	古墳・奈良	散布地
37	鉢塚遺跡	小野町小野赤沼字鉢沼	縄文	散布地
38	永田原遺跡	小野町小野赤沼字二永田原	縄文・奈良・平安	散布地
39	小塩館跡	小野町谷津作字館	中世	城館跡
40	関場遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・奈良・平安	散布地
41	関場B遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・平安・近世	散布地
42	仁井殿遺跡	小野町雁股田字仁井殿	縄文	集落跡
43	黒森館跡	小野町雁股田字堀切	中世	城館跡
44	堀切遺跡	小野町雁股田字千保	縄文	散布地
45	神山B遺跡	小野町雁股田字新切	縄文	散布地
46	西牧館跡	小野町小野山神字八升蒔	中世	城館跡
47	畑田遺跡	小野町小野山神字畑田	縄文	散布地
48	切掛遺跡	小野町飯豊字切掛	奈良・平安	散布地
49	鴨ヶ館跡	小野町飯豊字館ノ腰	縄文・弥生・平安・中世	城館跡・集落跡

郡から分出して成立したものと考えられ，小野町および田村市滝根町・大越町の一部を含む地域がこれに当たると考えられている。小野赤沼の無量寺に安置される阿弥陀三尊像はこの頃の作とされ，県重要文化財に指定されている。小野保の成立以降は白川結城・石川氏などの支配下にあったと考えられるものの記録が乏しい。戦国期にいたって三春田村氏によって掌握され，天正17（1589）年に伊達政宗の支配下に入る。町内では，この時期の城館として猪久保城跡や鴨ヶ館跡を磐越自動車道建設に伴い調査している。猪久保城跡は現存する記録・文献に記載がなく，城主や変遷については不明であった。調査においては，平場16箇所に主殿・倉を含む掘立柱建物跡８棟のほか，門跡・土橋跡・堀跡・柵列などの多くの遺構が検出され，15世紀前半に自焼の後破却されたと推定されている。鴨ヶ館跡は郡山と三春への分岐点に位置し，掘立柱建物跡や竪穴状方形土坑・堀跡・通路跡・門跡を伴う虎口などが検出され，15世紀後半から16世紀前半まで機能していたと考えられる。

近世の小野町は，豊臣秀吉の奥州仕置以後蒲生氏郷に宛われ会津領となる。慶長３（1598）年に上杉氏，同６年の関ヶ原の戦い後に再び蒲生氏を経て，寛永４（1627）年に丹羽長重の白河藩領となる。後に南東部の湯沢村のみ三春藩の所領となり幕末まで継続する。白河藩領については白河藩主の転封に従い神原・本多・松平（奥平）・松平（結城）氏と領主が変遷し，寛保元（1741）年松平（結城）氏の転封に伴い天領に組み込まれ，町域北部は越後高田藩領となる。その後，町域中部から南部は常陸笠間藩領，中西部は越後新発田藩領となる。高田・新発田両藩領は，後に再び天領に組み入れられるが，笠間藩領は一時の磐城平藩統治期を挟むものの幕末期まで継続する。この頃の遺跡としては，鍛冶久保遺跡で17世紀前半から19世紀前半の屋敷跡・墓坑・陶器窯跡などが検出されている。このほか，本飯豊遺跡では墓坑，柳作Ｃ遺跡では掘立柱建物跡・土坑・溝跡・畑跡などが調査されている。

明治期に入って小野町域の村々は，北部の飯豊村，中部の小野新町村（後に町），南部の夏井村の３村に合併し，昭和30年に３町村が合併して現在の小野町となった。

第４節　遺跡の位置と地形

沢目木Ｂ遺跡は，田村郡小野町大字雁股田字黒森に所在する。黒森は雁股田の北東端に位置し，黒森川の上流域を占めており，東側は黒森川を挟んで同町大字菖蒲谷と接する。

遺跡は，黒森川とその支流の合流点付近に位置し，黒森川の谷底低地沿いに西へ延びる県道矢吹・小野線が，遺跡付近で支流に沿って十石川方面へと南西方向にカーブする。夏井川と黒森川の合流点がある小野新町から西へ約4.5㎞の距離に位置している。

遺跡が立地する地形は，黒森川南岸にある標高500ｍの丘陵に挟まれた谷地である。遺跡の現況は上下２枚の水田であったが，水田自体は昭和50年代に行われた圃場整備によって削平・盛土して造成されたものである。元来の地形は，北側を黒森川によって画される北東方向にのびる丘陵の小尾根とその東側の谷底低地であり，小尾根の南側には低地に向かって沢が入る。尾根は平坦に削平

図5　調査区周辺地形図

されていたものの，東側・南側の斜面は残存していた。

遺跡の北側に隣接する西から東へと伸びる丘陵の東斜面には西田H遺跡が所在する。試掘調査の結果両遺跡の間には埋積谷が存在していることが確認されている。よって本遺跡が存在する小尾根はこれとは別個の，南側の丘陵から派生したものと判断される。

第5節　調査の方法と経過

方　法　今回の調査で用いた測量座標は，国土座標Ⅸ系の座標値を有する工事用設計杭を基準として設定し，メートル単位の下三桁を座標値として示した。グリッドは調査範囲の北西側の［X＝142,145，Y＝66,445］を原点とする5mの方眼を配置し，東方向にアルファベット，南方向に算用数字を原点から付して，その組み合わせによって示すようにした。設定したグリッドは，現地において測量杭またはピンを設置して示し，遺跡の図化，遺物の取り上げに用いた。標高は，測量座標と同様に，設計杭を基準とし，調査範囲内に仮のベンチマークを移設して測量に用いた。

遺跡内の堆積土の掘削は，現表土・盛土層には重機を用いた。表土層除去後の検出作業および遺物包含層の掘削は，草削り・移植鏝を用いて人力によって行った。沢部および遺物包含層下の堆積土の掘削はトレンチを掘り込んで遺物の有無を確認した後に，無遺物層および後世の攪乱層につい

ては重機を用いて除去した。掘削に際しては，深度が４ｍに及び湧水の可能性が考えられたことから安全を考慮し，図上の要保存範囲を上端として調査区壁に勾配をつけて掘削した。

遺物の取り上げはグリッド単位で行い，土層観察用畦および平面的な観察から出土層位を記録した。記録図は，特に遺物出土状況の記録が必要と思われた場合には1/10，土層断面図は1/20，地形図は1/200で図化した。記録写真の撮影には35㎜のモノクロ・カラーリバーサルフィルムを原則として用い，６×4.5㎝版のモノクロ・カラーリバーサルフィルムも補助的に併用した。

これらの調査記録および出土遺物については当事業団の定める基準に従って整理し，当報告書刊行後に福島県教育委員会に移管している。

経　過　沢目木Ｂ遺跡は，平成17年４月１日付の委託契約により，同年４月５日付で福島県教育委員会から指示があり，発掘調査することとなった。当事業団では，こまちダム遺跡発掘調査担当調査員１名に加え，他事業担当調査員２名の協力体制を組んでこれにあたった。

調査区内へ流れ込む水路の切り回しなどの条件整備のついた４月13日より表土の掘削を開始し，翌日までに調査事務所の建て上げ，発掘器材の搬入などを終了させた。表土の掘削は４月27日まで継続した。４月18日からは作業員を雇用し，表土除去の終わった丘陵部分での遺構検出作業を開始した。試掘で確認していた遺物包含層の範囲確認後，基準杭の移設を行い，掘込を開始した。

遺物包含層の掘削は，試掘５号トレンチ南壁面を土層観察用畦として層序を確認しながら行い，４月28日までに５号トレンチ北側を掘りきった。ゴールデンウィーク後に南半の掘削を継続したが，ＬⅣ上面において遺物の集中を認め，以降はＬⅢ下部・ＬⅣ上面・ＬⅣ上・中・下部と細分して取上を行った。５月19日までには土層観察用畦を残して縄文時代晩期の遺物が出る層を掘りきった。同月26日には土層観察用畦の除去も終了して，遺物包含層の調査を終了させた。

遺物包含層の基盤層には所々に黒褐色土が混入していたため，６月初旬に断ち割りを入れたところ，遺物包含層の基盤層は湿地上に崩落した再堆積土と判断された。その際，湿地堆積土の一部から縄文時代早期の遺物が出土したため，６月21日に再堆積土を重機によって掘削し，湿地堆積土を人力によって掘り込んだ。

低地部の調査は，５月９・10日にトレンチを掘り込んで遺物出土層位を再確認した。中位に堆積するＳ－ＬⅡとした黒色土中の遺物量は僅かで，当初期待された有機質遺物も流木，葦の根などで，人口遺物は確認できなかった。一方，最下層のＳ－ＬⅢとした砂礫層から縄文時代晩期の遺物が多く出土したことから，Ｓ－ＬⅡは重機によって掘削することにし，同月17・18日にこれを行った。翌日からＳ－ＬⅢの人力掘削を開始し，６月10日まで行った。また，沢跡の丘陵への立ち上がりが不明瞭であったため，６月14日以降はトレンチを掘り込んで沢跡の堆積状況を再確認した。

この間，５月28日に遺跡の案内人による現地公開を行い，70名ほどの見学者が訪れた。

ほぼ完掘状態となった６月22・23日に地形測量を行い，同月28日には全景写真を撮影した。翌日より７月１日までに器材・事務所等の撤収作業を終わらせた。７月４日に県中建設事務所・県教委・当事業団の３者で調査終了確認を行い，遺跡を引き渡した。調査日数はのべ52日であった。

第２章　調査の成果

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図６）今回の調査で確認された遺構は，縄文時代晩期の遺物包含層１箇所のみである。遺物包含層は北東方向へと伸びる小尾根の黒森川に面した東斜面に位置する。基本土層の項で述べるように，東斜面は川の蛇行によって抉られた湿地上に丘陵堆積土が崩落して形成された斜面であり，ここに基本土層でⅡ～Ⅳ層とした遺物包含層が堆積している。

遺物包含層南側に伸びる小尾根に連続して岩盤が微高地として残存して，調査区内においては低地が二分される形となっている。おそらく南側は南西より流れ込む沢によって形成された低地，北側は黒森川の旧河道にあたるものと考えている。

遺物包含層と沢の関係は，遺物包含層および下位のＬⅦを切ってＳ－ＬⅡ・Ⅲが堆積しており，更に下位にＬⅩが堆積する状況であった。このことから，遺物包含層は堆積後に流路を変えた沢および黒森川によって浸食を受け，それによって形成された低地が更に水田耕作などにより攪乱されたと考えている。

基本土層（図７）遺跡内の土層は，丘陵部の遺物包含層およびその上下の堆積土を遺跡の標準的な堆積土と考え，Ⅰ～Ⅹ層（ＬⅠ～Ⅹ）とした。沢及び低地部の堆積土は本来の堆積土が水流による浸食，後世の攪乱を受けたものと考え，これとは別に沢Ⅱ・Ⅲ層（Ｓ－ＬⅡ・Ⅲ）とした。

ＬⅠは，昭和時代に行われた圃場整備に伴う盛土である。

ＬⅡは，黒褐色を呈する遺物包含層上部の土層である。しまりが弱く，１円硬貨などが出土していることなどから圃場整備以前の耕作土と考えられる。

ＬⅢは，暗褐色を呈する遺物包含層中部の土層である。

ＬⅣは，黒褐色を呈する遺物包含層下部の土層である。

ＬⅤは，遺物包含層の基盤となる層で，明褐色粘質土と黒褐色土の混土である。黒褐色土には，褐色の軽石片を含む。丘陵の表層が地滑りしたことによって形成されたと考えられる。遺物はごく僅かに出土する。

ＬⅥは，灰～黒褐色の砂層で，下部が粗砂，上部が細砂となる。水性堆積と判断される。遺物は含まない。

ＬⅦは，明褐色粘質土，それがグライ化した青灰色粘質土，灰色砂の混合土で，丘陵の地山であるＬⅪａの崩落によって形成したと判断される。遺物はない。

ＬⅧは下部より砂質土・粘質土・砂で構成される層で山際に三日月形に堆積する。次に述べる崩落層ＬⅨの上位にあたり，地山崩落によってえぐれた部分が湿地となった際に堆積したと推測される。ＬⅧｂとする黒色粘質土から縄文時代早期の土器が出土している。

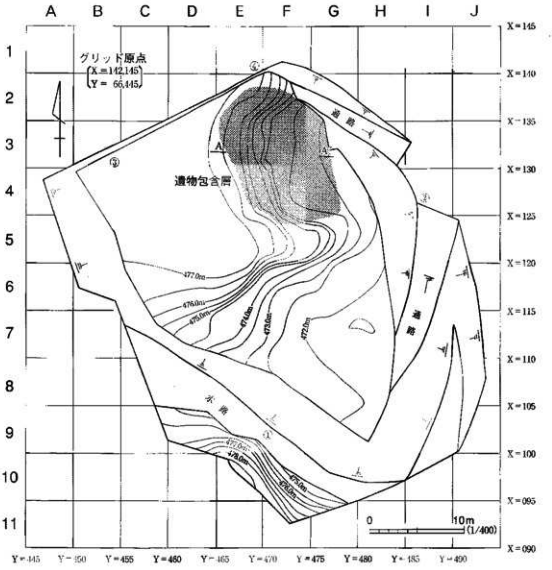


図6　調査区全体図

LⅨは，粘土および花崗岩塊で，地山の崩落層である。遺物はない。

LⅩは下部より砂利・砂・粘質土の順に堆積し，上部には流木などの有機質が堆積していることから，旧黒森川河道の堆積土と考えている。遺物は出土していない。

LⅪは地山である。aは丘陵部では粘土と砂の互層であり，沢部では，グライ化した青灰色の砂・粘土の互層となり，粘土中には木材などの有機質が混じっている。bは花崗岩盤である。

S－LⅡは，黒～黒褐色砂質土と灰色砂の互層で，沢による浸食後の湿地性堆積土である。遺物は少量出土する。

S－LⅢは，上部が灰色砂，下部がオリーブ黒色砂礫である。遺物は多く出土する。遺物包含層下の土層を切って堆積し，土師器・須恵器が少量ながらも出土していることから，古くとも平安時代より後に堆積したと考えられる。よって確認できた沢跡自体は遺物包含層と同時期に存在したものではなく，後世の浸食によって形成されたものと判断できる。

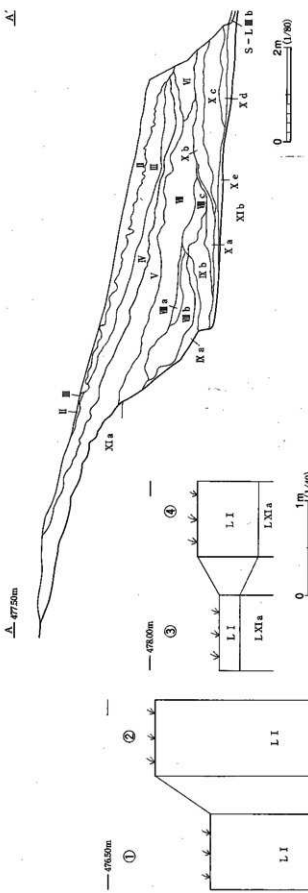

A 47.50m
A'
XIa
II
III
IX a
IX b
VIII a
VIII b
V
IV
III
II
I
XIb
X a
X b
X c
X d
X e
S－LIIIb
2m (1/80)
0
47.50m
①
②
47.00m
③
④
LI
LXIa
1m (1/40)
LI
S－LII
S－LIIIb
LXe
S－LIIIa
S－LIIIb
LXIb
基本土層
I　水田耕作土より客土
II　黒褐色砂質±10YR2/2(褐色土粒含む，しまりなし)
III　暗褐色砂質±10YR3/3(炭化物含む)
IV　黒褐色砂質±10YR3/1(炭化物含む)
V　黄褐色±2.5Y5/6と黒褐色砂質±2.5Y3/1の混土
(パミス，ブロック含む)
VI　上部より灰黄褐色砂10YR4/2，黄灰色砂2.5Y4/1，
黒褐色粘砂2.5Y3/1
VII　灰白色粘±5Y8/1，灰色砂5Y6/1，にぶい黄橙色粘±10YR7/4の
混土
VIIa　黄灰色砂 2.5Y5/1
VIIb　黒色粘質 2.5Y2/1(流動性を強かにもつ)
VIIc　黒褐色砂質± 2.5Y3/1
IX a　黄褐色粘土 10YR5/8
IX b　赤褐花崗岩
X a　明灰黄色砂質土 2.5Y4/2(有機質多量含む)
X b　黄灰色砂 2.5Y4/1
X c　灰色砂 5Y4/1
X d　赤褐色砂礫 5YR5/8
X e　灰色砂礫 N5/0
XIa　灰白色粘±5Y8/1，灰色砂5Y6/1の互層(地山)
XIb　花崗岩盤
SLII　灰色砂質±10Y4/1と黒褐色±2.5Y3/1の互層
SLIIIa 灰色砂7.5Y5/1
SLIIIb オリーブ黒色砂礫10Y3/1

図7　基本土層図

第２節　遺物包含層　ＳＨ１

１．概　　要（図８・９，図版５～９）

堆積範囲・状況　遺物包含層は，Ｅ・Ｆ・Ｇ－１・２・３・４・５グリッドにまたがる約100㎡の範囲に堆積していた。遺物包含層の基盤となるＬⅤがなす地形は，丘陵頂部からの急斜面が474.50ｍ付近で傾斜を減じて平坦面を形作っており，擂り鉢を半割したような地形となっている。その窪みを埋めるように遺物を多量に包含するＬⅡ～Ⅳが堆積していた。これらの遺物包含層は，斜面の上位を水田造成のための削平によって失っており，斜面下位についても現況の水田法面から下方へとは延びず，沢跡堆積土によって切られている。

各層の状況を概述する。上部のＬⅡは黒褐色砂質土で，しまりのない土である。層厚は10～36㎝で，ＬⅢとの層理面は波打つような状態である。試掘調査の成果ではこの層からも多くの遺物が出土していることから，これも遺物包含層に含めて調査をした。断面観察の結果として，層理面および現況の水田法面に被るような堆積状況が認められたことに加え，出土遺物中に硬質も含まれていたことから，ＬⅡは圃場整備以前の耕作土と解釈した。中部のＬⅢは暗褐色砂質土で，炭化物粒を少量含んでいる。層厚は斜面部・平坦部ともにあまり変わらず18～38㎝を測る。下部のＬⅣは黒褐色砂質土で，炭化物粒を少量含む。斜面部の層厚は15～38㎝で，前述の474.50ｍ付近で層厚５㎝前後と堆積が薄くなり，平坦部では25㎝程度の層厚となる。

遺物出土状況　遺物包含層の出土遺物点数は，縄文土器・土製品9,730点，土師器４点，石器・石製品1,138点である。グリッドごとの出土点数を図８に示した。Ｆ３・４グリッドからの出土が過半数を占め，現場での所見では，その中でも東半の平坦な部分から多く出土していた。グリッドごとの接合状況は，２グリッド列の土器が４グリッド列の土器と接合することはほとんどなかった。これは，２グリッド列の出土点数自体が少ないことも影響していることは否めないが，遺物が投棄された状況が遺存しており，ある程度のまとまりを持って出土していると理解することも出来る。

層位別の出土点数は，ＬⅡ土器2,066点・石器371点，ＬⅢ土器3,250点・石器379点，ＬⅣ土器4,413点・石器389点，層位不明土器１点である。石器はほぼ均等な割合を示しているのに対し，土器についてはＬⅣが半数近くを占めている。特に図９に示したように，Ｆ３・Ｇ３グリッド南半からＦ４・Ｇ４グリッド北半の平坦部のＬⅣ上面において台付鉢，粗製深鉢などの同一個体破片および礫の集中が見られた。ただし，全体の接合の結果を見ると，層位ごとのまとまりはなく，小型の浅鉢などはＬⅣ出土の大破片にＬⅡ・Ⅲの破片が接合している，もしくは大型の深鉢などは各層から出土した破片が接合しているという状況であった。

次に，出土土器の時期別重量を表３に示した。晩期の土器で大半が占められ，早・前期・後期の土器は微量混じる程度である。さらに晩期では粗製土器が５割以上を占めているが，これは器壁の厚さも影響を与えていることも考えられ，精製土器2.5割，粗製土器4.5割程度の比率になろうかと

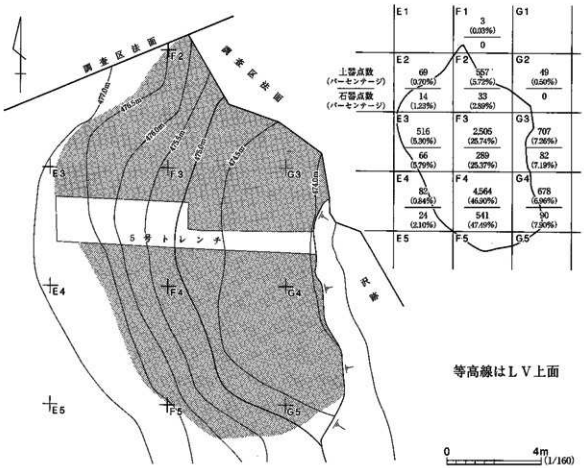


図8　遺物包含層，遺物出土点数

表3　遺物包含層出土縄文土器時期別重量（単位はg）

	LⅡ	LⅢ	LⅢ下部	LⅣ上面	LⅣ上部	LⅣ	LⅣ下部	時期別計	重量%
早・前期	60	110	0	0	0	50	30	250	0.3%
後期	0	0	5	0	0	0	195	200	0.2%
晩期精製	1,538	3,365	775	2,188	2,464	8,778	4,702	19,108	20.5%
晩期前葉	5	45	5	0	15	815	170	1,055	1.1%
晩期中葉	1,533	3,320	770	2,188	2,449	7,963	4,532	22,755	24.5%
晩期粗製	10,069	13,154	2,387	680	4,145	16,279	5,915	52,629	56.6%
櫛描文	45	190	35	30	20	1,070	150	1,540	1.7%
撚糸文	1,193	2,529	260	5	570	2,084	609	7,250	7.8%
網目状	7,622	8,338	1,569	218	2,492	10,320	4,171	34,730	37.3%
無文	675	1,072	372	403	688	966	708	4,884	5.3%
縄文	475	995	151	24	331	1,799	277	4,052	4.4%
条痕	59	30	0	0	44	40	0	173	0.2%
底部	689	870	83	26	241	2,345	807	5,061	5.4%
分類不能	2,227	3,227	840	95	598	2,989	1,082	11,058	11.9%
層位別計	14,583	20,726	4,090	2,989	7,448	30,441	12,731	93,008	100.0%

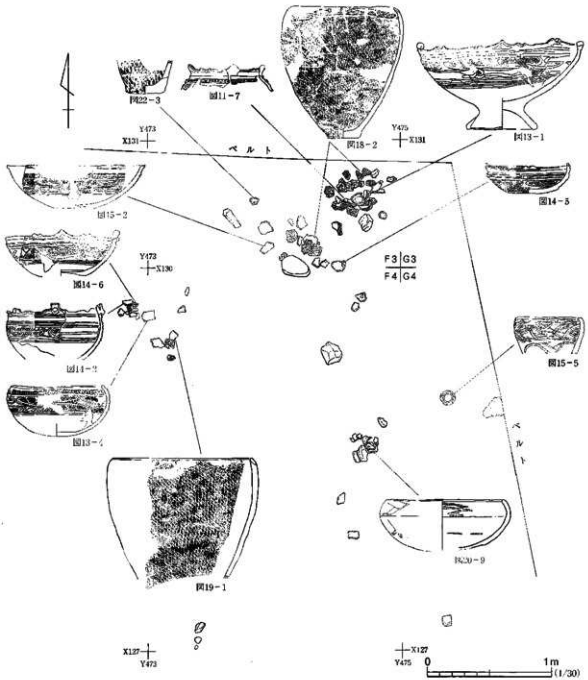


図９　遺物包含層南半ＬⅣ上面遺物出土状況図

思われる。また精製土器の比率では，中葉に比定されるものが多いことがわかる。各時期の層位ごとの出土量を見ると，早・前期の土器はＬⅡ～Ⅳのいずれにも混じっており，後期末葉の土器はＬⅣ下部から出土している。また，晩期の精製土器でも前葉に比定されるものはＬⅣに多く，ＬⅣ下部からの出土も比較的多い。それに対し，晩期中葉の精製土器および粗製土器はいずれの層からも出土している。

遺物の平面的な出土状況から土器はこの場に廃棄されたものと解釈でき，層位的な出土状況からこの遺物包含層は，出土土器の大部分を占める縄文時代晩期中葉に形成されたものと考えられる。

２．出土土器（図10～21，図版10～18）

縄文時代晩期以前の土器（図10－１～６）

１～３は早期後葉～末葉に比定されるもので，１・２は内外面に条痕，３は地文条痕文に絡条体圧痕文が施される。４は前期前半に比定される単節縄文のみ施される繊維土器である。

５・６は後期末葉に比定される同一個体片である。平口縁に２個１組および１個の突起がつく。突起の内側には縦にヘラによる刻みが施される。文様帯の上下を刻み付きの平行沈線で区画している。表面の摩滅が著しいが，木葉形に弧線を連結させた文様が描かれていると思われる。

縄文時代晩期の土器（図10－７～図21－22）

精製・粗製の別，および時期によって大きく４つに分類した。

Ⅰ類（図10－８～21）　晩期前葉～中葉に比定される精製土器で，羊歯状文・綾絡文を描くもの。

８は口縁部下にくびれを持つ深鉢である。平口縁で口端部には刻みを有する。単節ＬＲ縄文を地文とし，口縁上部および体部のくびれ直下の部分に文様帯を持つ。９・10も同様の口縁部片と思われ，口縁部上端に羊歯状文が認められる。11は口縁部下が強くくびれる器形で，口縁部上端の文様帯下は無文となる。12～18は口縁の内湾する器形の深鉢と思われ，口縁部と体部に数段の文様帯を持つ。19～21は深鉢の体部下半で，底部の直上は無文となる。

Ⅱ類（図10－７）　晩期中葉に比定される半精製の深鉢である。若干外傾する短い口縁部から弱くくびれて，膨らみの少ない体部へとつながる。口端部には刻みが施される。口縁部上端および体部上端に平行沈線を巡らせ，体部上端の沈線間には刺突を加えている。地文は単節ＬＲ縄文である。

Ⅲ類（図11～17）　晩期中葉に比定される精製土器で，雲形文およびそこから派生した文様を描く。復元個体が多く，以下復元できた器種ごとに説明していく。

短頸壺（図11－１～図12－２・図16－６～15・図17－12・13）４単位の大突起を有する口縁部下にごく短い無文の頸部を持ち，肩の張る体部を持つ。文様帯は肩部に置かれ，文様帯内には横回転の単節縄文，以下には縦回転の撚糸文・網目状撚糸文が施される。図11－１のような大型のものは少なく，同図２以下のような小型のものが多い。口縁部は図11－１～４・７のように上端が張り出して頸部との境が明瞭に段をなすものと，５・６のように曖昧なものがある。体部の地文は図12－１を除いて網目状撚糸文である。

図11－１は左右に小突起を伴う大突起と小突起によって口縁部が飾られる。文様帯の上部は刺突を加えた沈線によって区画する。文様帯は様々なアレンジを加えた三叉文を組み合わせ，それらをＳ字状の沈線で区画している。

同図２は体部の膨らみが小さく縦長である。口縁部は大突起間に小突起１組を配する。文様帯はＣ字文および三叉文を組み合わせた文様を描く。体部の網目状撚糸文は他に比べて目が粗い。

同図４は小型の壺である。口縁部には大突起の間に２個１組の小突起を２つ配する。上下に向いた三叉文を交互に組み合わせ，その間にＳ字状の区画を入れている。同図３も同様の文様を描くも

のである。

同図５・６は４単位の大突起に２個１組の小突起を１組づつ配する。５は上部に刺突を付した沈線を一巡させ，上下に半楕円形の区画文を配している。６は太い沈線によって陽彫的な表現となるＣ字を基調とした入組文様を描いている。

同図７は口縁部・頸部のみの資料で，大突起間に小突起を１組ずつ配する。文様帯の上部を刺突を付した沈線によって区画し，突起と同単位で小瘤状の貼付を施す。図12－１・２は体部のみ残存したもので，１に撚糸文，２に網目状撚糸文が施される。

図16－６～15・図17－12・13には破片を示した。いずれも小型壺の破片である。図16－６～11は突起を有する口縁部片でいずれも刺突を付した沈線が施され，Ｃ字文・三叉文を組み合わせた文様が描かれる。同図12～15は太沈線による入組文が描かれる。

図17－12・13は口縁部にメガネ状付帯文が付される口縁部破片で，上記のものよりも新しい可能性もある。

長胴壺（図12－３～７・図16－16～30）口縁部には突起を有し，頸部は直立もしくは内傾気味で緩やかに体部へとつながる。体部は肩を持たず，最大径は体部の中程にある。文様帯は頸部から体部の上端に置かれ，体部には網目状撚糸文が施される。図12－５は器形が若干異なり，肩がやや張り出す体部に単節ＬＲ縄文が施されている。

図12－３・４の文様帯は地文に単節縄文を施し，３は上下にＣ字文もしくは楕円形の区画文，４は端部が発達して逆ｅ字状となったＣ字文を描く。同図５～７の文様帯には太い沈線によって陽彫的な表現となるＣ字文の入組文様を描いている。

図16－16～30には破片を示した。16・17は地文縄文上に文様が描かれ，16はＣ字の入組文様，17はＣ字文が描かれる。18～28は太沈線によるＣ字の入組文様を描く口縁部片で，口縁部には大型のＡ突起，小型のＢ突起が認められる。文様帯は上部を刺突を加えた沈線で区画し，23のようにこの部分に小瘤を貼り付けるものも認められる。29・30はこれと同様の体部片で，文様帯下には網目状撚糸文が施される。

深鉢（図12－８～10・図16－１～５）図12－８・９は外傾気味の口縁部から底部に向かって緩やかに内湾しながらすぼまる体部を持つ深鉢である。文様帯は体部の直上に置かれ，口縁部との間に無文帯を挟む。文様帯にはいずれも太い沈線によって入組文様が描かれ，体部には網目状撚糸文が施される。８は口縁に４単位の突起を持ち，突起の前部及び左右に瘤状の貼付を持つ。９も口縁が断片的にしか残存しておらず明確にはわからないが，突起が付くようである。文様帯の区画に刺突を加えた沈線を用いている。図12－10は丸みを帯びた体部から４単位の突起を有する口縁部が外反気味に立ち上がる器形である。口端部に刻みを持ち，文様帯の上部には刺突を加えた沈線を用いる。文様帯には地文に単節ＬＲ縄文を施し，Ｓ字状の区画文のみを描く。体部には網目状撚糸文を施す。これについては，Ｆ３グリッド５号トレンチ北側の斜面部のＬⅣ上部からほぼ一括状態で出土したものである（図版９）。

図16－１～５は破片である。いずれも復元個体とは異なり地文ＬＲ縄文上にＣ字文が描かれている。１は上端に刺突を加え，３は沈線間に刺突を付している。２・４・５は口縁部上端に刻みを付し，文様帯の上部に刺突を加えた沈線を巡らせる。

台付鉢（図13－１・図15－３・４）図13－１は大型で，４単位の大突起の両脇に２個１組で前部に瘤状の貼付を持つ小突起が配される。大突起の前部には三角形の凹みが付される。文様帯上部は対向するＣ字文の下位を連結させた四角形を無文部とする。下部には三叉文および亠字文を充填している。地文は単節ＲＬ縄文である。これについてはＦ３グリッドＬⅣ上面において倒立してつぶれた状態で一括出土している（図９）。図15－３・４はこれよりも小型の高台部のみの破片である。

浅鉢・鉢（図13－２～図15－２・５・図17－１～11）小型品が多く，復元できた個体が多い。

図13－３は皿状の器形で，体部の下半まで文様が及ぶ。口縁部は摩滅・欠損した部分が多く明瞭ではないが，数個の突起が付くようである。文様は，右下がりのつ字状曲線による区画に三角形の凹みを充填した単位文様を描いている。地文には単節ＬＲ縄文が施される。

図13－２・４は口縁が内湾し，底部が丸底状となる椀型の器形である。文様帯の上部には刺突を付した沈線を一巡させる。文様帯地文はいずれも単節ＬＲ縄文である。２の文様はＣ字文を連結させた文様を上下に配置している。３は半楕円形の区画文を上下に並べ，その間にできる平行四辺形状に残存した部分を除刻状に凹ませている。

図13－５～図14－１は大型の浅鉢で，口端部と文様帯の間に凹みを一巡させる。５は同図４と同様に半楕円形の区画を上下に並べ残存した部分を凹ませている。６は２連のＣ字文間を無文とし，亠字文，除刻した三角文を充填した文様を描く。図14－１は上部にＣ字文を重層的に配置し，下部にノ字文を付した三角形の配置文様を描いている。

図14－２は口縁部が内湾する椀型の器形である。口縁部には上部に穿孔のある大突起が１ないし２個付き，その周りに凸字形を呈する突起を飾る。その間にさらに小型の突起を配していく。文様は日字様の文様を配置し，その間に四角文を除刻表現したものを配している。

図14－３・６・図15－２は口縁部に突起が付く皿状の器形で，口縁と文様帯の間に凹みを一巡させる。図14－３は２個１組の小突起３組を前後に配する。文様はノ字文を付したＣ字文を上下に配する。同図６は大突起の両脇に２個１組の小突起を配する。Ｃ字文の下部に横位に連結した三角形の充填文様を描く。これについてはＦ４グリッドＬⅣ上面から出土した（図９）。図15－２は２個１組の小突起が確認できるが，他は欠損しており不明である。文様帯の上部には刺突を加えた沈線を一巡させ，さらにそこに小瘤状の貼付を施す。文様は上下に半楕円形区画を並べ，除刻した三角文，亠字文を充填している。

図14－４は小型の鉢である。口縁部に装飾は付かず，凹みを一巡させるのみである。文様帯には上下に向いた三叉文を交互に組み合わせた文様を描く。

図14－５は口縁部に３単位の二瘤状大突起を配し，間をメガネ状付帯文でつなぎ，その間に２個１組の小突起を６個配する。口縁部と文様帯の間には４単位のメガネ状付帯文が１段付く。文様帯

にはノ字文付のＣ字文が一筆描きされて渦巻状になった文様が上下に配されている。文様帯地文は左撚りの撚糸文を用いている。これもＦ３グリッドＬⅣ上面から出土した（図９）。

図15－１は口縁部が内湾し，体部との間は稜をなす器形を持つ。口縁部には小突起だけが残存している。体部上半に文様帯を持ち，文様帯上には刺突入りの沈線を一巡させ，小瘤を貼り付ける。文様帯には上下に連結した半楕円形区画を並べ，その隙間に三叉文を充填している。

図15－５は口縁部の内湾する小型の鉢と思われる。文様帯を沈線によって上下に区画し，上部に入組文様，下部には弧線を細い沈線によってかなり乱雑に描いている。Ｇ３グリッドのＬⅣ上面において倒立した状態でそのまま出土した（図９）。

図17－１～11は破片である。いずれもＣ字文を基調とした文様を配置するものと思われる。１は大突起が付された口縁部上端に刻みが施される。文様帯の下まで地文がおよぶ。２・８は口縁部直下が一帯凹まされている。３は口縁端部に刻みと沈線を組み合わせ，浮彫状の波状文を描いている。４はＣ字文を組み合わせ，入組文様を描く。５は大突起が斜めに取り付けられている。６・７は同一個体で，口縁部上端が一帯凹まされ，二瘤状の突起が取り付けられる。９・10は椀形を呈する同一個体片で，大突起が付き，文様帯上部には刺突の入った沈線を一巡させる。11は文様帯内に地文が施されない。文様帯上部は間に刺突列を付した平行沈線で区画している。

注口土器（図17－14・15）いずれも算盤玉形を呈する注口土器の屈曲部片である。14は突起が施され，体部下半にも文様が描かれる。同図15は隆帯状の張り出し部に押引き状の刺突を付し，体部の下半は無文となる。

半精製土器（図15－６～13・図17－16～22）口縁部の装飾のみで文様帯を持たないものである。図15－６は口縁部が内折する鉢である。口縁端部に刻みを加え，横位に３条施した沈線の一番上に刺突を加えている。体部は横回転の結束羽状縄文を施している。７は無文の口縁部と網目状撚糸文が施される体部の間を刺突を加えた沈線で区画している。８は口縁端部に細かい刻みを付し，沈線と刺突列を巡らせている。地文は単節ＲＬ縄文である。９は口縁上端に刻みを付し，直下に凹みを一巡させる。体部との区画は２条の沈線を用い，上位の沈線に刺突を加えている。10は４単位の突起を有し，口縁上端に刻みを付す。区画は３条の沈線を用い，体部は擬似縄文が施されている。11は凸字状の突起を有する。口縁直下から擬似縄文が施される。12・13は体部のみの破片で，網目状撚糸文が施されている。

図17－16～22は破片である。16・17・20は完形個体とほぼ同じ特徴のものである。18は口縁部が屈曲し甕形の器形となる。平行沈線間に刺突列を付して区画線としている。19は口端部が欠けているが，太い沈線２条で無文の口縁部を区画する。21・22は体部に羽状縄文が施される。

その他（図17－23・24）図17－23は釣手土器の一部と思われ，前後に獣面が表現される。頂部に耳状の突起が１対付き，そこから鼻梁を派生させている。目は沈線で楕円を描いて表現される。横には２個１組の突起が付され，周囲は刺突によって飾られる。同図24は粘土棒の上端に貫通孔が穿たれるもので，蓋の取っ手かと推測される。

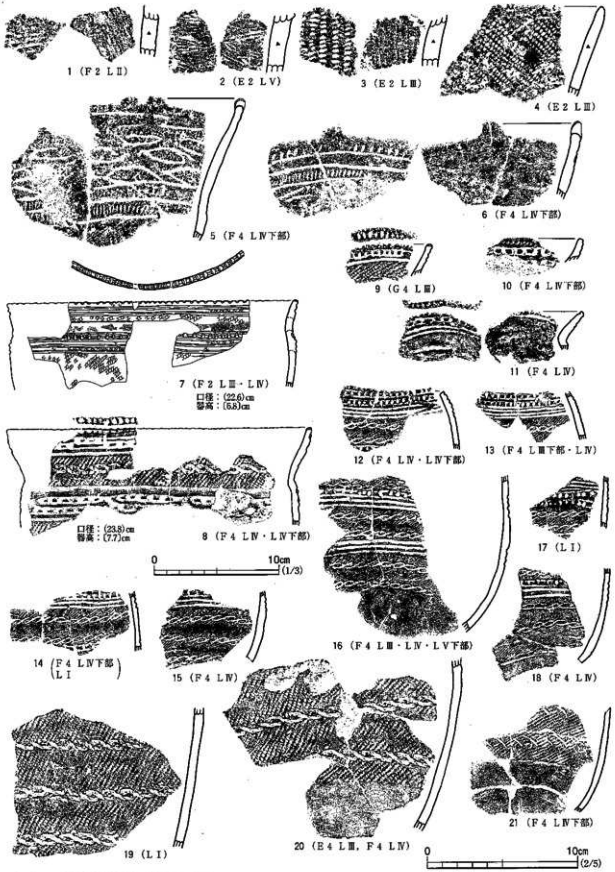


図10　遺物包含層出土土器（1）

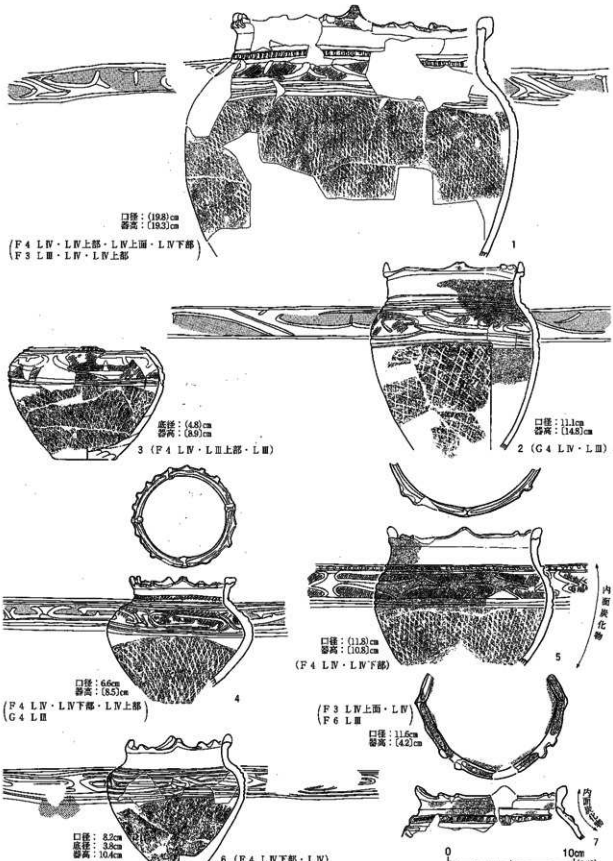


図11　遺物包含層出土土器（2）

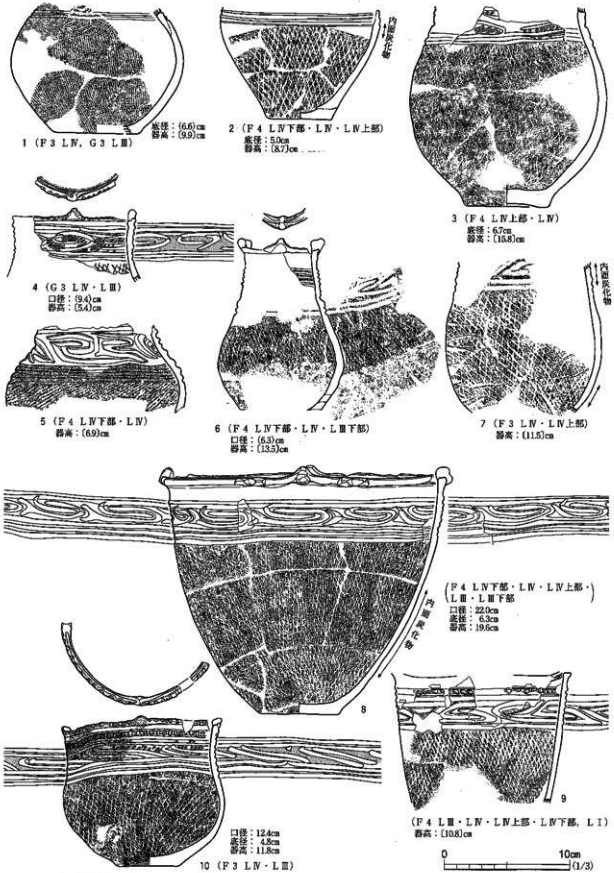


図12　遺物包含層出土土器（3）

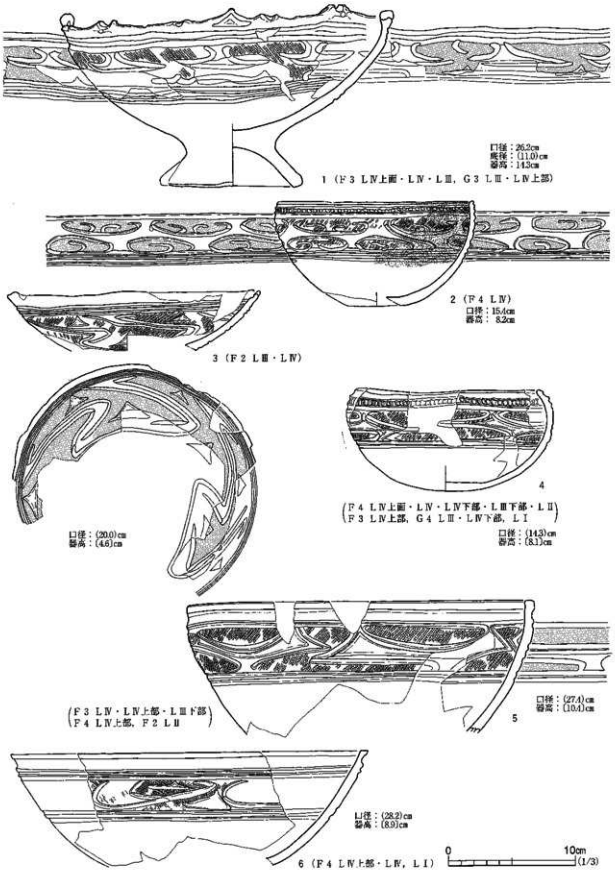


図13　遺物包含層出土土器（4）

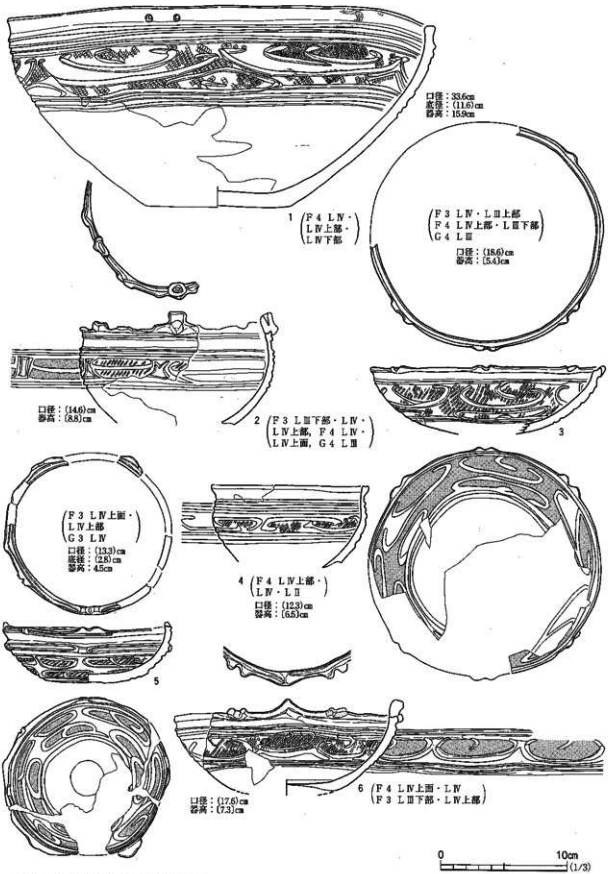


図14　遺物包含層出土土器（5）

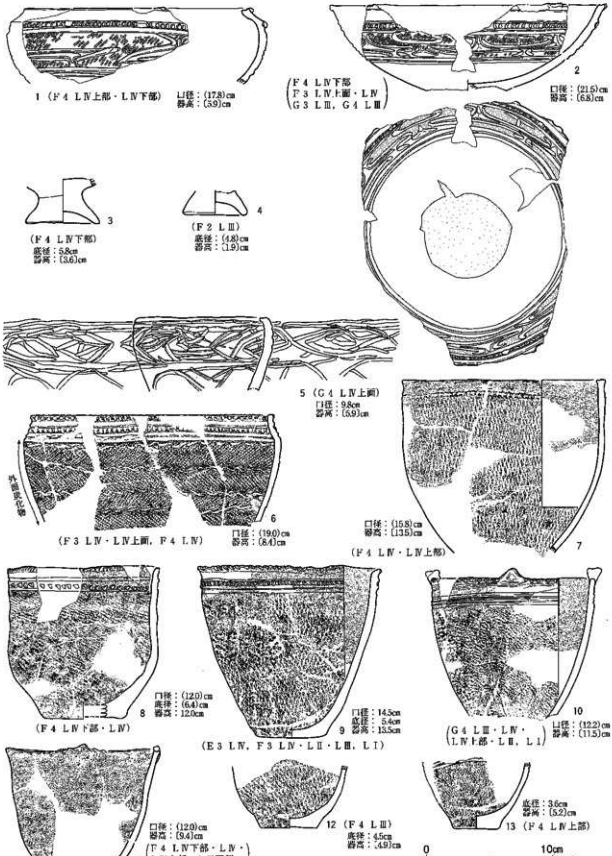


図15　遺物包含層出土土器（6）

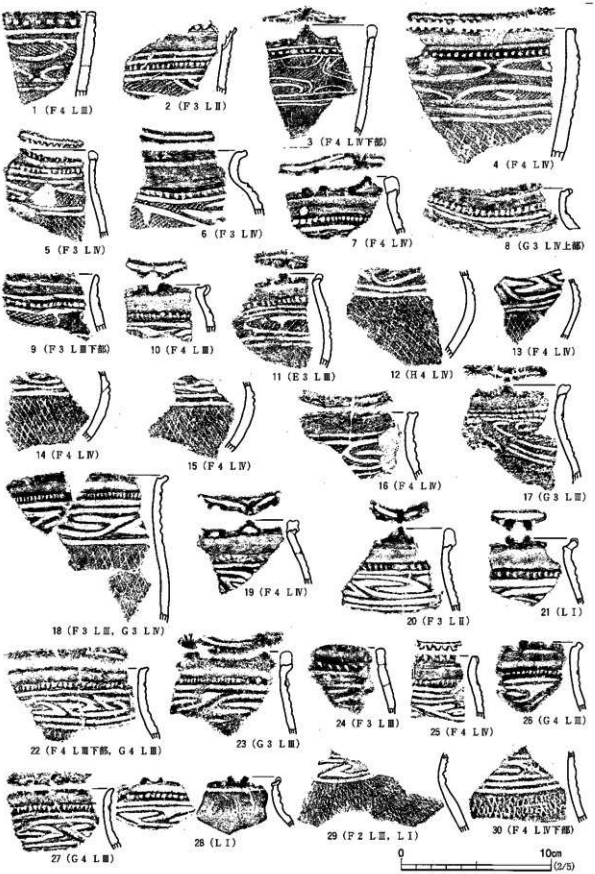


図16　遺物包含層出土土器（7）

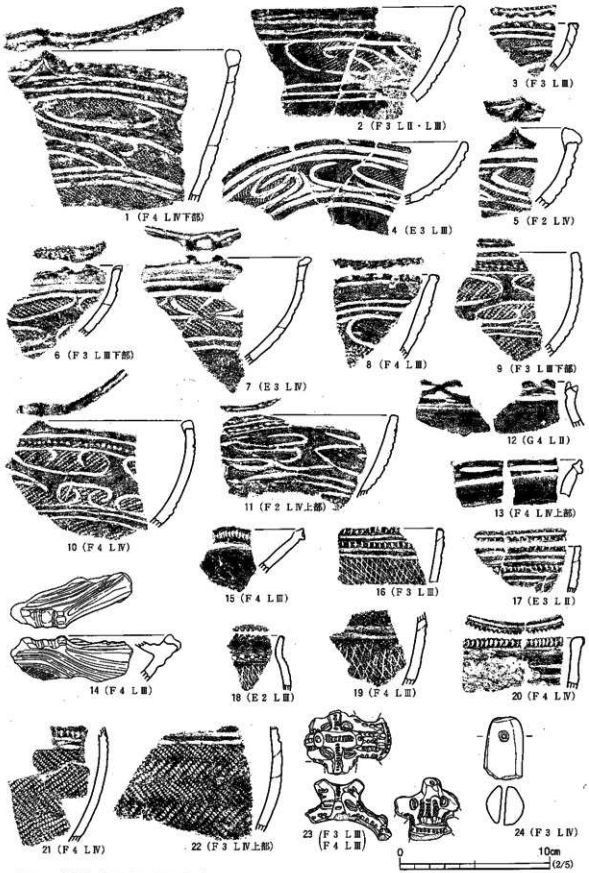


図17　遺物包含層出土土器（8）

Ⅳ類（図18～21）　縄文時代晩期の粗製土器である

深鉢（図18・19・図21－3～18・21）粗製土器の中でも大部分を占め，復元個体の点数も多い。図18のみ大型品を1/4で掲載し，以下は1/3である。

図18－1は櫛歯文が施される。口縁部はほぼ直立もしくは若干内湾する器形で，櫛歯状工具により口縁部上端に区画線を一巡させ，体部に流水状の曲線文を描いている。図21－6・7は同様の破片である。

図18－2～図19－7は撚糸文・網目状撚糸文が施されるものである。口縁が内湾して体部上半が膨らみ，底部に向かってすぼまっていく器形が大半を占める。輪積みを残して複合口縁にするものも多い。口縁部は横回転，体部は縦回転と施文の方向を変えている。内面はナデ調整され，上半にミガキが認められるものもある。図18－2・3・5・図19－1～3・5は左撚りの条を巻いた単軸絡条体第5類による網目状撚糸文が施される。図18－4・図19－4・6・7は撚糸文が施される。図18－4が右撚りであるほかはいずれも左撚りで，大型である図18－4・図19－6・7の条は太い。図19－4は施文方向を斜位にし，なおかつ交差させて網目状に見えるようにしている。

図21－3～5は網目状撚糸文が施される体部下端から底部の破片である。3の底面には木葉痕が認められる。4は上げ底状になっている。図21－8～13には撚糸文施文の破片を示している。8は口縁が内折する鉢形を呈すると思われ，上端に刻みを加えた口縁部は無文とし，沈線で区画した体部には目の粗い網目状撚糸文が施される。10は複合口縁上に地文を施さず，横位の短沈線を描き，体部に網目状撚糸文を施す。11･12は口縁上端に無文帯が置かれ，その下部に横回転部を一帯挟み，体部縦回転で網目状撚糸文を施す。13は口縁部が無文となる甕形のものである。

図19－8は無節左撚りの縄文が施されるもので，口縁に向かって直線的に開く器形となる。

図21－14・15は縄文施文の底部破片である。14は沈線区画を入れ，体部下端を無文としている。15は底面に布圧痕が認められる。

図21－16～18は条線・条痕施文されるものである。16は積み上げ痕を残した口縁部で，横方向の細かい筋が認められる。17は口端部に沈線を巡らせ，口縁部横方向，体部縦方向の条線が認められる。18は体部破片で，目の粗い条痕が認められる。

図21－21は無文の口縁部片で，口縁直下に隆帯を貼り付けている。

短頸壺（図20－1～5・図21－1・2・20）丸い体部に直立する口縁部が付く器形を持つ。いずれも平縁で口縁部を無文としている。図20－1は体部との境に沈線を施し，体部には網目状撚糸文を施す。同図2は体部の膨らみが小さいもので，撚糸文が施されている。同図3は精製土器の短頸壺に近く，口縁部上端に段を有し，頸部はよく磨かれている。体部上半には撚りの異なる単節縄文を横回転によって羽状に施し，下半には網目状撚糸文が施されている。同図4は体部のみの破片で，撚糸文が粗雑に施文されている。図21－1・2は小型壺の体部破片で，1には単節ＬＲ縄文，2は網目状撚糸文が施される。図20－5は無文の体部である。体部は最大径を持つ部分が弱い稜をなしている。図21－20は小型で無文の短頸壺で，頸部～体部の破片である。

浅鉢・鉢（図20－6～10・図21－19・22）いずれも無文で，外面はミガキ調整され光沢を帯びるものが多い。図20－6・7は丸底の椀形の器形である。6には口縁部上端に沈線を一巡させている。図20－8は平底の鉢である。図20－9は口縁部が内湾する浅鉢である。これについては，F4グリッドLⅣ上面から出土している（図9）。図20－10は丸底皿状の器形である。口縁部上端に強くナデを入れ，凹みを作り出している。図21－19・22は丸底椀形の浅鉢の口縁部破片である。

土師器（図22－13）

底部に墨痕のある杯がLⅡから1点出土している。内面黒色処理されたロクロ整形の杯で，体部は回転ヘラケズリ調整されている。9世紀に位置付けられる。

3．出土土製品（図22，図版18）

ミニチュア土器（図22－1～5）　1は壺形で，文様帯には亠字文を配置し，この間に3条の縦位沈線を挟む。2も壺形の体部で，沈線区画の下に単節LR縄文が施されている。3は深鉢形の体部で網目状撚糸文が施される。F3グリッドのLⅣ上面で出土した(図9)。4は注口土器のミニチュアと思われるが，口縁および注口部は欠損している。体部の下半は手捏ねで整形され，上半部は粘土紐を一帯積み上げている。5は無文の体部片で指による調整痕が明瞭に見られる。

土偶（図22－6～8）　6は胴体と左腕のみ残存していた。左腕は遺物包含層LⅢから出土しているのに対し，胴体は沢跡のS－LⅢから出土しており，遺物包含層と沢跡の唯一の接合例である。胴体は下部が前後とも張り出しており，下端から径4㎜の穴があけられている。肩には突起が付き，刺突が巡っている。胴体前面は剥落部分が多く全体の模様は不明で，V字状の沈線，出っ張りには縄文が僅かに確認できる。背面は肩の刺突から縦位に刺突列を2条中央に垂下させ，両脇から前腕部に向けて弧線を2条描く。前腕部には赤色塗彩の痕跡が認められる。7は腕の破片で手先は二股の突起として表現されている。6と同様肩部に刺突が施され，上腕には三叉を描く沈線が施される。8は足の破片であろう。

土版（図22－9）　楕円形の土版で，人面が表現されている。眉は刻み付き隆帯を貼り付け，その下部には鼻を表現した隆帯が垂下していたであろうが剥落している。目は沈線で楕円を描いて表現され，口は凹ませてある。口からは太い沈線1条と刺突列2条が垂下し，その両脇に刺突列を挟めた3条の平行沈線によって対向弧線を描く。背面は上端に二瘤状の貼付を施し，頭髪の表現をしているものと思われる。中央に3重の同心円を描き，刺突を挟めた平行沈線による対向弧線をその周囲に描く。下端から径5㎜程度の工具を突き刺して穴があけられている。

耳飾（図22－10）　鼓形を呈する耳飾で，前部は面取りされ，側面に短沈線と矢羽状沈線を交互に配した文様を付けている。

玉（図22－12）　径1㎝弱の玉で，径1.5㎜程度の孔が穿たれている。

焼成粘土（図22－11）　ユビオサエによって整形された粘土紐である。剥離痕がなく隆帯の一部とも思われず，用途は不明である。

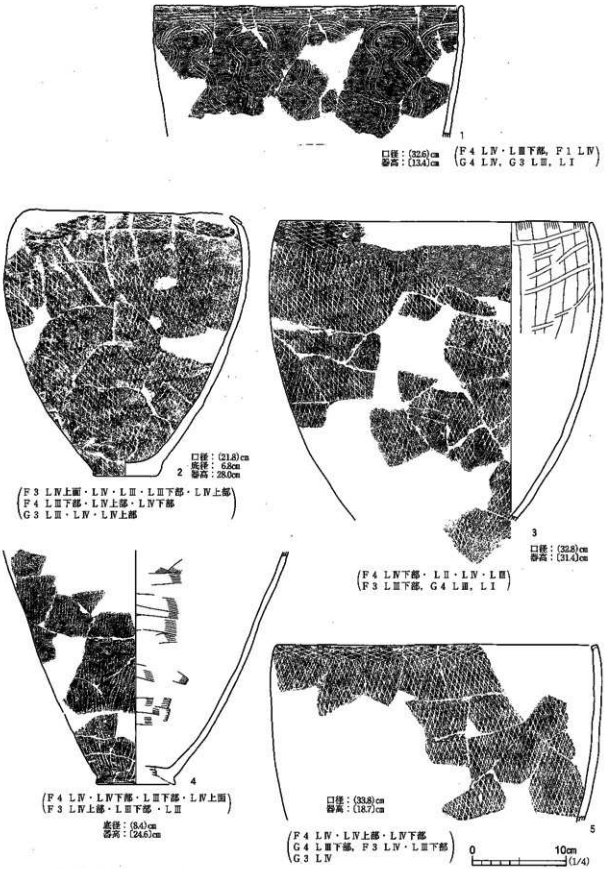


図18　遺物包含層出土土器（９）

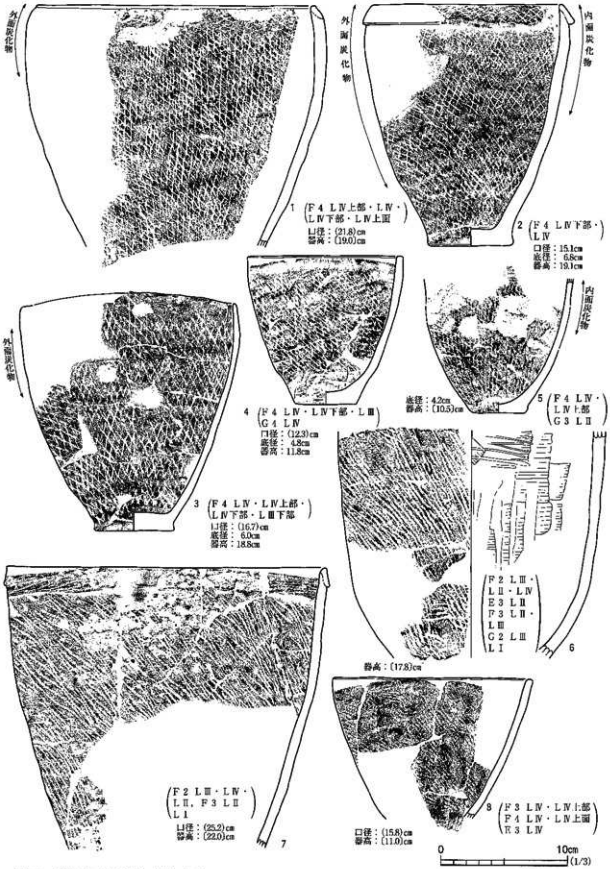


図19　遺物包含層出土土器（10）

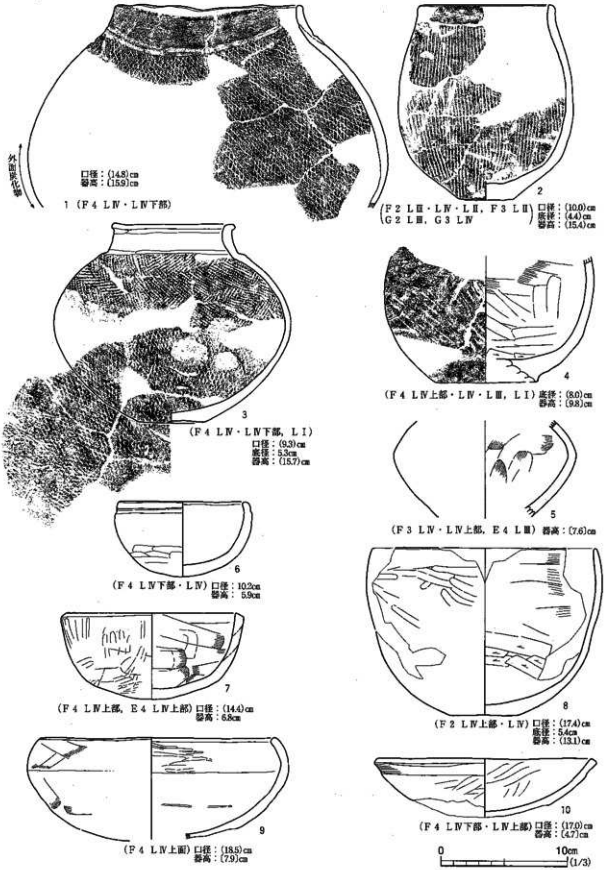


図20　遺物包含層出土土器（11）

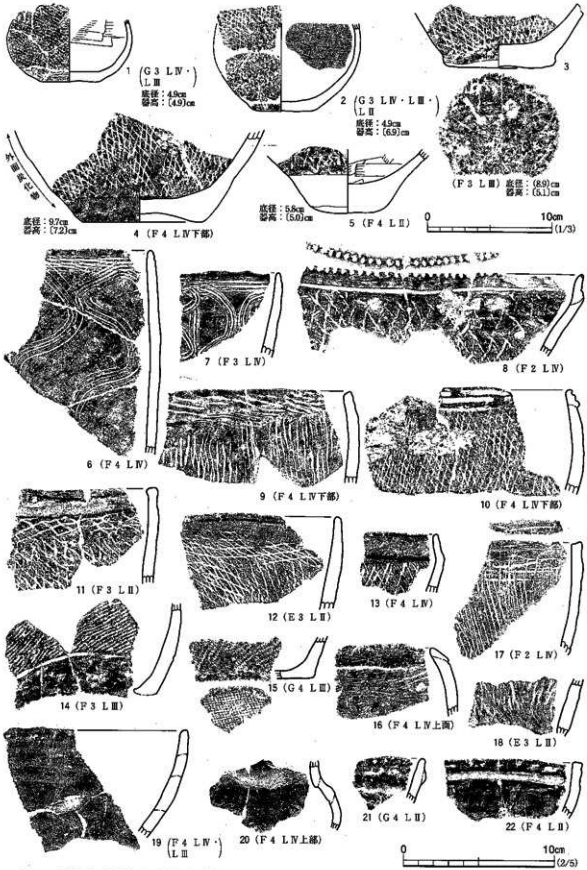


図21　遺物包含層出土土器（12）

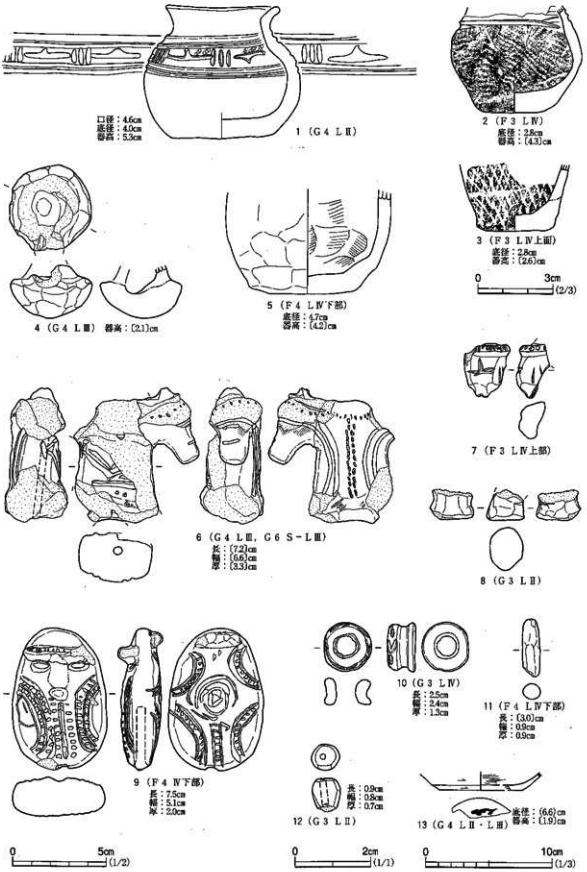


図22　遺物包含層出土土製品

４．出土石器（図23～26，図版19・20）

石器・石製品の大部分が剥片で，狭義の「石器」として加工されたものの数は非常に少ない。なお，石器の石質については『こまちダム遺跡発掘調査報告３」「第２編　西田日遺跡」での鑑定結果に準拠して（福島県文化振興事業団2005），調査員が鑑定している。

石鏃（図23－１～図25－３）　石鏃もしくはその未成品と認定できるものは51点出土し，すべて図示した。流紋岩の剥片が多く用いられ，次いでデイサイト質凝灰岩，他に黒曜石，頁岩，石英なども認められる。

図23－１～８は有茎石鏃である。長さ２～３㎝で鏃身が二等辺三角形を呈し，基部が平坦なものが多く，５のみが鏃身が正三角形を呈し，短めの茎が付く形態である。

図23－９～16は有茎鏃の未成品と思われるものである。いずれも茎の作出は終了しているものの，鏃身に素材剥片の厚み，湾曲などが残存している。

図23－17～19は無茎の凸基鏃である。19は素材の厚さを残しており未成品と思われ，以外の２点はいずれも２㎝に満たない小型品である。

図23－20～図24－７は無茎の凹基鏃である。図23－20～図21－３は長幅比が２：１前後のものである。若干基部を凹ませるだけの平基に近いものが多いが，図23－20・23・24は基部の抉りが大きく，しっかりとした脚部をつくっている。図24－４は珪質頁岩製で，他よりも大型である。基部が広く側縁が弧状になる。図24－５・６は長幅比が１：１程度の小型品である。図24－７は未成品と思われるものである。

図24－10～15は平基の石鏃である。凹基鏃と同様で，10～13のような長幅比２：１程度のものが多く，14・15のような小型品は少ない。

図24－16～20は欠損した先端部片である。17は黒曜石製で，表裏の中央部に磨りガラス状の部分が認められ，研磨されている可能性がある。

図24－８・９・21～図25－３は完成形態の不明な未成品である。

石錐（図25－４～９）　錐部と思われる尖頭部を有するもので，出土した６点すべて図示した。石質はいずれも流紋岩である。４は棒状に加工され，一端に断面三角形の錐部が作出される。５は上部に自然面を残す剥片素材を棒状に加工したもので，断面三角形の錐部を持つ。６は剥片の一端に断面三角形の棒状の錐部を作出している。７は一端に断面菱形の棒状錐部が付く。８・９は剥片の一端に尖頭部を作出している。

二次加工のある剥片（図25－10）　39点出土したうち１点のみ図示した。10は小型の剥片素材の一側縁に二次加工が施されている。

打製石斧（図25－11）　１点のみ出土している。大型の剥片素材で，加工を背面に集中させる。腹面の加工は側面のみで，素材の起伏が残存している。

石核（図25－12～14）　大型の石核が３点出土している。なお，図示していない残核と考えられ

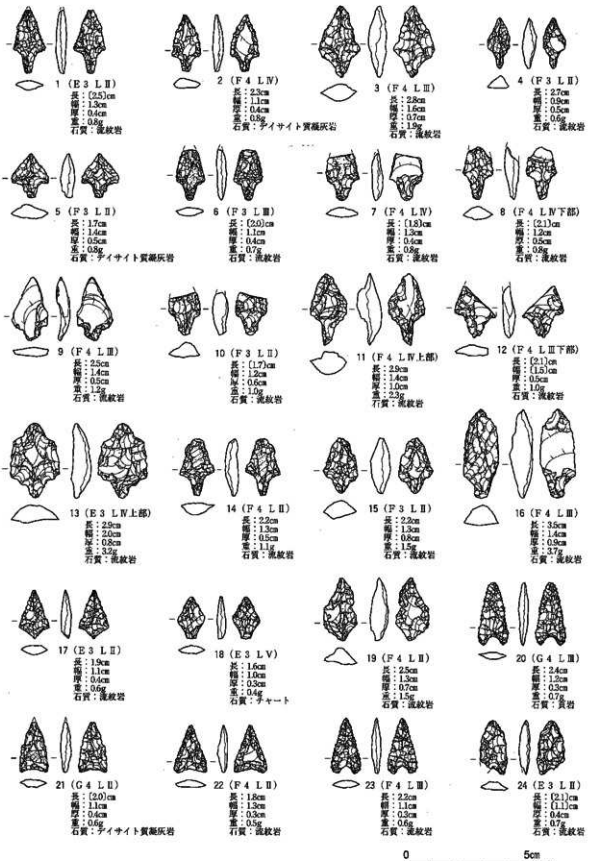


図23　遺物包含層出土石器（1）

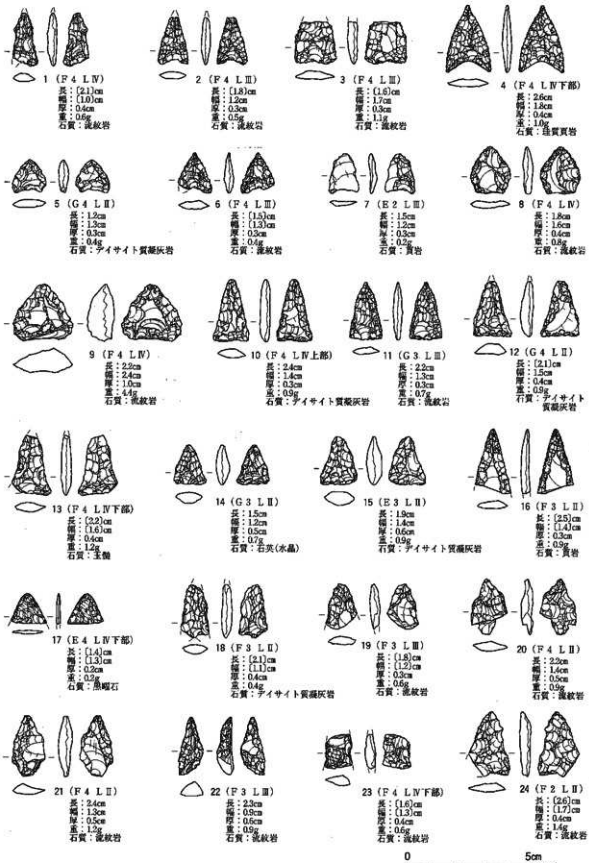


図24　遺物包含層出土石器（2）

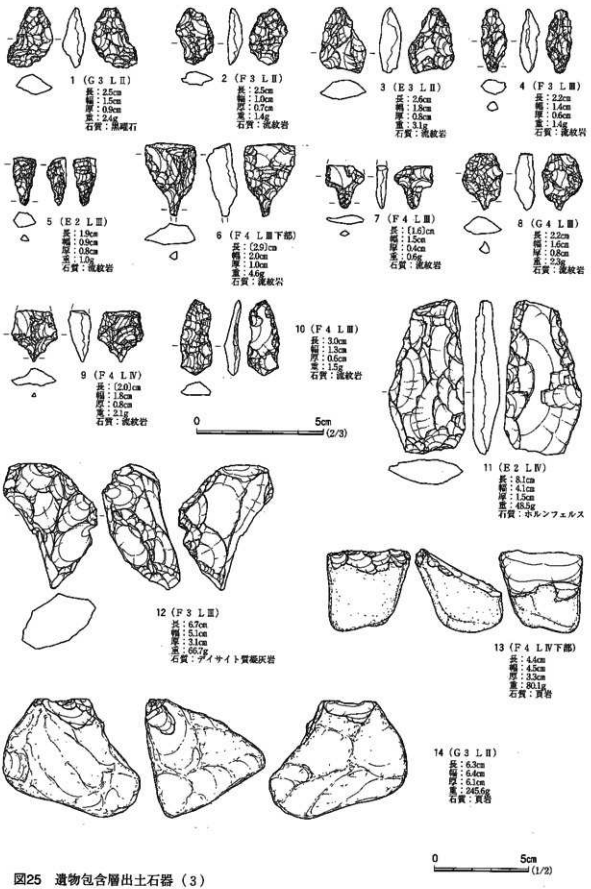


図25　遺物包含層出土石器（3）

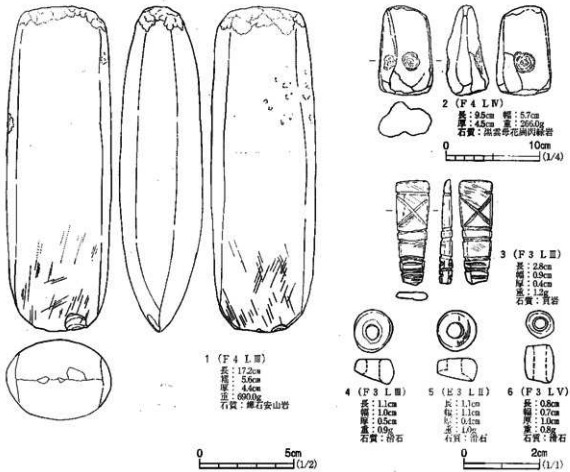


図26　遺物包含層出土石器・石製品

るこれよりも小型のものが18点出土しているが，器種の判別できない石器の未成品である可能性もある。12はデイサイト質凝灰岩の整状石核である。13は半割された礫の端部から剥離されている。13は亜角礫の端部に剥離面が数枚認められる。

磨製石斧（図26－1）　1点のみ出土している。大型の磨製石斧で，断面楕円形を呈し刃部は蛤刃である。刃部に3箇所の使用による衝撃剥離が認められる。基部上端および側面には敲打痕状の凹みが見られ，これも使用時の何らかの痕跡かと思われる。

凹石（図26－2）　1点のみ出土している。花崗岩の凹石で，表裏および左側面にも凹みが認められる。表面は風化が著しく研磨の有無はわからない。

5．出土石製品（図26，図版20）

装身具（図26－3）　撥形の石製品である。全面研磨によって上部は断面扁平に，下端は断面円形に整形される。横線区画の内部に斜格子および横線を線刻している。

玉（図26－4～6）　4・5は扁平な玉である。いずれも厚さに偏りが見られ，片面は平らなのに対し，もう一面は孔に向かって凹む形状である。孔径はそれぞれ4.5mm，4mmである。6は径が小さく縦長の形状である。径3mmの孔が穿たれる。

第3節 沢　　跡

1．概　　要

沢跡は，G・H3～5グリッドおよび6グリッド列以南に位置する。丘陵尾根から続く微高地を挟み，調査区南部に南西から入る沢と黒森川沿いの低地とに分けられ，堆積状況が若干異なる。

前者は，南西部から丘陵斜面を削り込んで調査区内に流れ込み，F・G7・8グリッド付近で流路幅を広げ，谷底低地へと変化している。低地の基盤はⅠXⅠbとした花崗岩の岩盤で，S－ⅠⅢが下部より砂礫・砂・砂質土の堆積が切り合いを持ちながら堆積しており，流れを数度に亘って変えていたと考えられる。黒森川沿いの低地については，S－ⅠⅢが現況の水田法面より下位に潜り込まず，ⅠXとする砂礫層の上に堆積していた。

出土遺物は縄文土器1438点，石器・石製品8点，土師器2点，須恵器1点である。このうち土師器・須恵器は南側低地のG6・8グリッドS－ⅠⅢから出土している。

これらの状況から，沢跡については明らかに縄文時代のものではなく，後世の攪乱層と判断することが出来る。

2．出土遺物（図27～29，図版17・19・20）

図27・28には土器を示した。図27－1は遺物包含層の所在する斜面直下から出土したものであり元来遺物包含層中に含まれていたものと思われる。遺物包含層晩期Ⅲ類と同様の4単位の大突起および小突起を有する浅鉢である。口縁部上端を隆帯状に張り出させ，文様帯との間は無文となる。地文は文様帯から体部の下端まで単節ⅠR縄文が施される。文様帯内は三叉文状に連結した上向きC字文と下向きC字文を組み合わせた文様を描く。

以下は破片である。図27－2は縄文時代前期の土器である。同図3～6は後期末葉～晩期初頭に帰属する。3は波状口縁の波底部の破片で，大型の瘤を2個縦に並べ，縦列する瘤から口縁に並行させて沈線を引いている。瘤の周囲には3条の刻み付き小瘤を配する。5は無文の平口縁で縦長の瘤を並列させている。6は入組帯縄文に三叉の陰刻が施されている。4は玉抱き三叉文の一部と思われる。

図27－7・10～15・18・22・29・30は，遺物包含層晩期Ⅲ類としたものと同類である。7は2個1組の小突起の付く深鉢で，地文縄文上に雲形文が描かれる。10は長胴壺としたものの体部上端の破片である。11～15は浅鉢の破片である。18は注口土器の体部片である。22はメガネ状付帯文が施される浅鉢で，口縁部に前方に張り出す突起が認められる。29・30は半精製深鉢の口縁部である。

図27－8・9・16・17・19～21・23～28は遺物包含層晩期Ⅲ類に後続する時期の精製土器である。8は短頸壺の口縁部と思われる。大突起の正面および側面に三角形の陰刻を施す。9は鉢もしくは壺形土器の口縁部破片と思われる。前部に突起の付く大突起を有し，口縁部上端は無文となる。

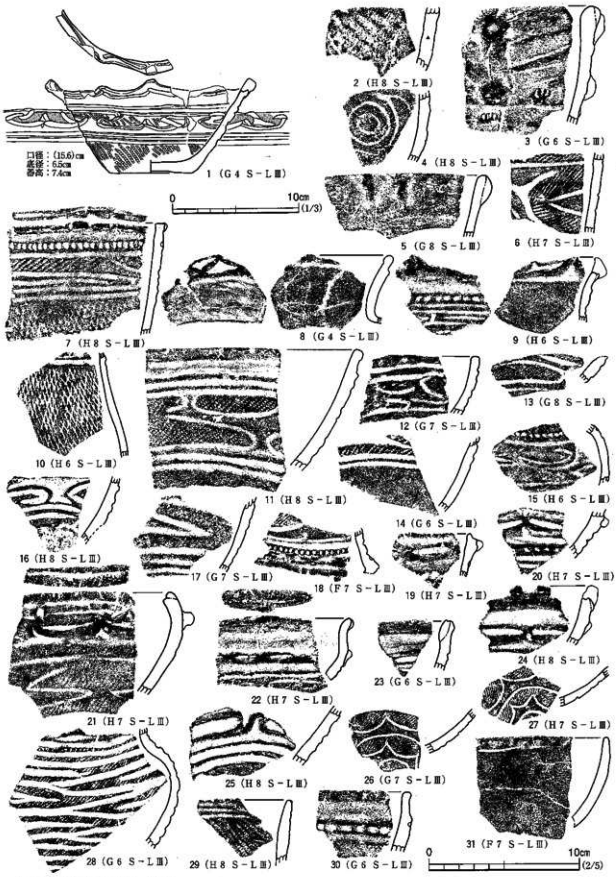

口径：(15.6)cm
底径：6.5cm
器高：7.4cm
1（G4 S－LⅢ）
2（H8 S－LⅢ）
3（G6 S－LⅢ）
4（H8 S－LⅢ）
5（G8 S－LⅢ）
6（H7 S－LⅢ）
7（H8 S－LⅢ）
8（G4 S－LⅢ）
9（H6 S－LⅢ）
10（H6 S－LⅢ）
11（H8 S－LⅢ）
12（G7 S－LⅢ）
13（G8 S－LⅢ）
14（G6 S－LⅢ）
15（H6 S－LⅢ）
16（H8 S－LⅢ）
17（G7 S－LⅢ）
18（F7 S－LⅢ）
19（H7 S－LⅢ）
20（H7 S－LⅢ）
21（H7 S－LⅢ）
22（H7 S－LⅢ）
23（G6 S－LⅢ）
24（H8 S－LⅢ）
25（H8 S－LⅢ）
26（G7 S－LⅢ）
27（H7 S－LⅢ）
28（G6 S－LⅢ）
29（H8 S－LⅢ）
30（G6 S－LⅢ）
31（F7 S－LⅢ）
0
10cm
(1/3)
0
10cm
(2/5)

図27　沢跡出土土器（1）

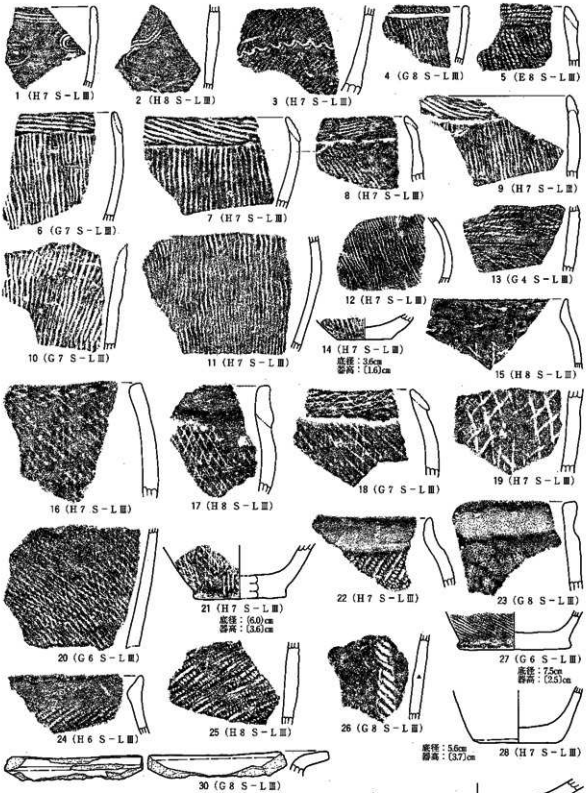

1（H7 S－LⅢ）
2（H8 S－LⅢ）
3（H7 S－LⅢ）
4（G8 S－LⅢ）
5（E8 S－LⅢ）
6（G7 S－LⅢ）
7（H7 S－LⅢ）
8（H7 S－LⅢ）
9（H7 S－LⅢ）
10（G7 S－LⅢ）
11（H7 S－LⅢ）
12（H7 S－LⅢ）
13（G4 S－LⅢ）
14（H7 S－LⅢ）
底径：3.6cm
器高：(1.6)cm
15（H8 S－LⅢ）
16（H7 S－LⅢ）
17（H8 S－LⅢ）
18（G7 S－LⅢ）
19（H7 S－LⅢ）
20（G6 S－LⅢ）
21（H7 S－LⅢ）
底径：(6.0)cm
器高：(3.6)cm
22（H7 S－LⅢ）
23（G8 S－LⅢ）
24（H6 S－LⅢ）
25（H8 S－LⅢ）
26（G8 S－LⅢ）
27（G6 S－LⅢ）
底径：7.5cm
器高：(2.5)cm
28（H7 S－LⅢ）
底径：5.6cm
器高：(3.7)cm
29（H5 S－LⅢ）
底径：(8.6)cm
器高：(2.3)cm
30（G8 S－LⅢ）
31（G8 S－LⅢ）
32（G6 S－LⅢ）
0
10cm
(2/5)

図28 沢跡出土土器（2）

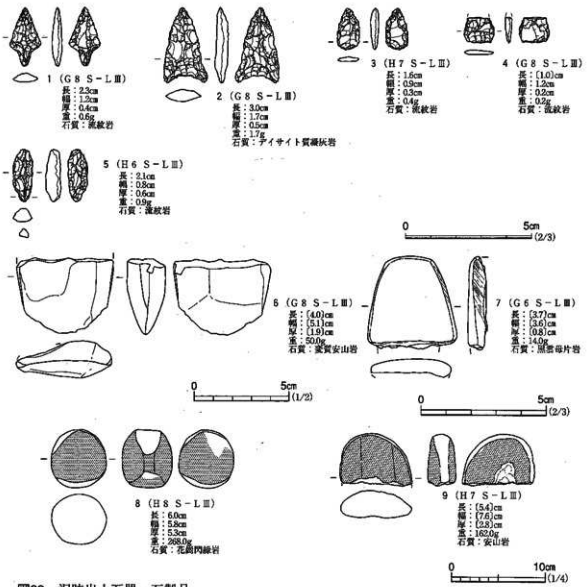


図29　沢跡出土石器・石製品

溝底に刺突を加えた沈線の下位には工字文が認められる。16・17・25～27は浅鉢の体部片である。このうち19～21・23・24にはメガネ状の付帯文から変化した貼付文が口縁部下に施される。特に20・21・24の貼付文の張り出し下部には三叉もしくは亠字に陰刻されている。文様帯の残存する21には，地文縄文上に綾杉状の沈線が描かれている。16・25は浮線文によって文様を描いており，16には，浮線による区画内部に地文縄文の痕跡が僅かに認められる。17には三叉状の文様の一部と思われる沈線が認められる。26・27は同一個体片で，連弧文様が描かれる。28は壺形土器の体部片である。頸部から肩部に太い沈線を4条巡らせ，中間に刻みを付す。体部には単節ＬＲ縄文が施され，綾杉状沈線の入組文様を描いている。

図27－31・図28－１～25・27～29は遺物包含層晩期Ⅳ類とした粗製土器である。１・２は櫛歯文の施される深鉢で，３は綾絡文が認められる体部の破片である。４～14は撚糸文が施される深鉢である。４は地文に撚糸文を施し口縁部に単沈線を一巡させる。このうち５～９は撚糸文が施される

口縁部で，７～９は複合口縁となる。10～13は同様の体部，14は底部である。15～21は網目状撚糸文が施される深鉢である。15は口縁部が内傾する甕形を呈すると思われ，それ以外は口縁部が内湾する形態を持つ。17は口縁部を無文としている。上端の粘土紐の下端を隆起させて複合口縁状を呈している。19・20は体部片で，21は底部である。22～24は口縁部無文となる短頸壺もしくは甕である。23が体部も無文となっている以外は体部縄文施文となっている。25は同様の体部片である。27～29は底部であり，27は撚糸文，28・29は無文である。図27－31は浅鉢の口縁部片で，口縁部に１条沈線が巡らされる以外は無文となっている。

図28－26については縦位に粘土が隆起した部**分のみに**０段多条左撚りの縄文が回転施文されている。胎土に繊維も微量ながら含んでいることから**早期後**葉～末葉に属するものかと思われる。

図28－30～32は古代の土器である。30はロクロ**整形の**土師器甕の口縁部破片である。31はロクロ整形の土師器杯の口縁部で，体部の上位まで回**転ヘラケ**ズリが及ぶ。内面はミガキ，黒色処理が認められる。32は須恵器甕の細片で，磨り消された**タタキ**メが痕跡としてみられる。

図29には石器・石製品を示した。１～４は石**鏃で，**１が有茎である以外はいずれも無茎である。２のみがデイサイト質凝灰岩を用い，以外は流紋**岩であ**る。５は流紋岩の石錐で，棒状に整形した端部に尖頭部を作出している。６は磨製石斧の**刃部片で**，断面は扁平，両刃である。７は石刀の端部片と思われる。８は球形の磨石である。９は**亜円礫を**用いた磨石で，表面は弧面を呈するのに対し，裏面は平坦で，凹みを有する。

第４節　遺構外出土遺物（図30・31）

本節では，遺物包含層および沢跡以外から出土した遺物について述べる。ＬＩとした盛土層からは縄文土器1,510点・石器136点，遺物包含層以下の再堆積層であるＬＶからは縄文土器19点・石器１点，湿地性の堆積層であるＬⅧｂからは縄文土器９点・石器５点が出土している。

ＬＩ出土の土器は大半が縄文時代晩期のものであり，そこに早期の遺物が混じるという遺物包含層と同様のあり方をしている。ＬＶに関しては，上位から出土するものは晩期に属する細片で，攪乱によって混入したものと言える。中位以下からは時期比定の難しい細片のみが出土している。ＬⅧｂからは縄文時代早期の土器が出土している。

図30には縄文土器を示した。１・２・５はＬⅧｂ出土の土器で，これら以外は盛土から出土している。１・２は口縁部が外反し上端部が肥厚する無文土器で，早期前葉～中葉に帰属する。５は縄文が施されている繊維土器で早期後葉～末葉に位置付けられる。

３は口縁端部に貝殻腹縁圧痕を施し，貝殻腹縁圧痕を沿わせた沈線で文様を描く。早期中葉のものである。４・６～８は早期後葉～末葉に位置づけられる繊維土器で４・６・７は表裏に条痕，８は縄文が施される。

９～11は羊歯状文，綾絡文が施される。遺物包含層出土の晩期Ｉ類と同様のもので，晩期前葉に

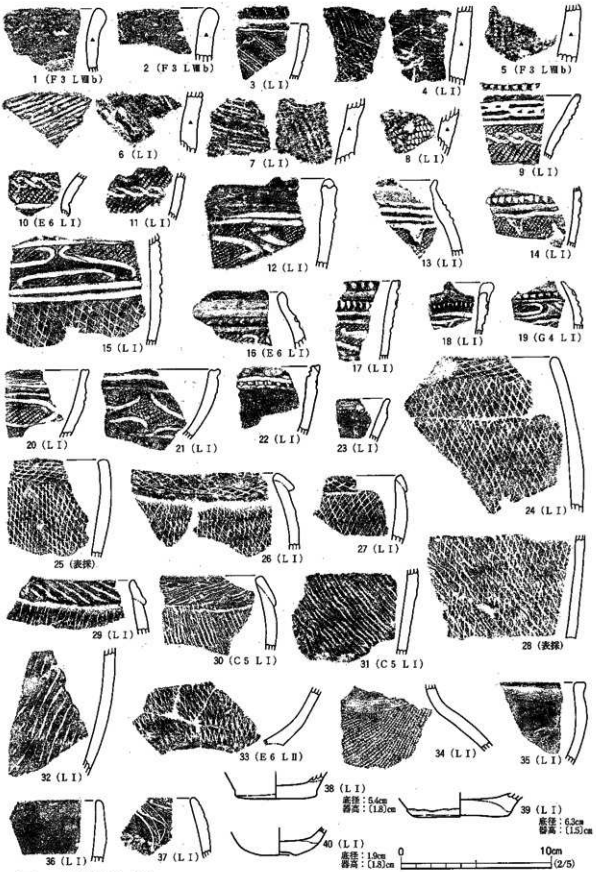

1 (F3 LⅢb)
2 (F3 LⅢb)
3 (LⅠ)
4 (LⅠ)
5 (F3 LⅢb)
6 (LⅠ)
7 (LⅠ)
8 (LⅠ)
9 (LⅠ)
10 (E6 LⅠ)
11 (LⅠ)
12 (LⅠ)
13 (LⅠ)
14 (LⅠ)
15 (LⅠ)
16 (E6 LⅠ)
17 (LⅠ)
18 (LⅠ)
19 (G4 LⅠ)
20 (LⅠ)
21 (LⅠ)
22 (LⅠ)
23 (LⅠ)
24 (LⅠ)
25 (表採)
26 (LⅠ)
27 (LⅠ)
28 (表採)
29 (LⅠ)
30 (C5 LⅠ)
31 (C5 LⅠ)
32 (LⅠ)
33 (E6 LⅡ)
34 (LⅠ)
35 (LⅠ)
36 (LⅠ)
37 (LⅠ)
38 (LⅠ)
底径：6.4cm
器高：(1.8)cm
39 (LⅠ)
底径：6.3cm
器高：(1.5)cm
40 (LⅠ)
底径：1.0cm
器高：(1.8)cm
0
10cm
(2/5)

図30　遺構外出土土器

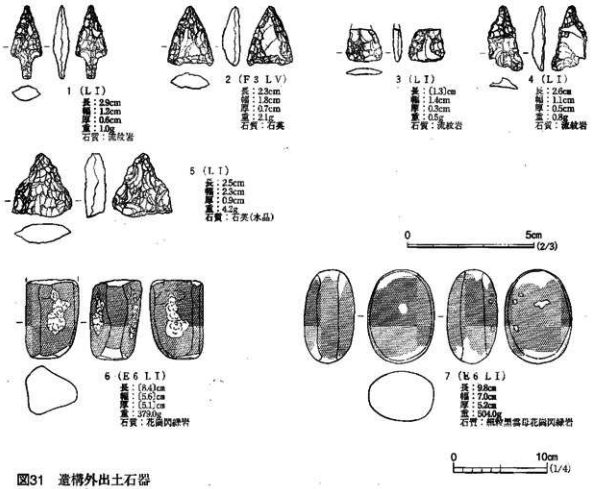


図31　遺構外出土石器

位置付けられる。9・10は同一個体と思われる。口縁部に羊歯状文が巡る深鉢で，体部との境はくびれている。11は体部の破片である。12～23は雲形文およびその派生文様が描かれる。遺物包含層晩期Ⅲ類と同様のもので，晩期中葉に属する。12～15・17は深鉢，16は短頸壺，18は長胴壺，19～21は浅鉢，22は半精製深鉢としたものである。23は半精製の浅鉢の細片と思われ，口縁部一帯が凹んでおり，体部の上端に刺突を加える。24～37は遺物包含層晩期Ⅳ類とした晩期の粗製土器である。特徴は遺物包含層のものと変わらない。24～33は深鉢で，いずれも撚糸文が施されている。34は縄文施文の短頸壺である。35・36は無文の浅鉢である。37は粗雑に条線を施した深鉢の口縁部である。38～40は同時期の無文の底部片で，38・39は深鉢，40は小型の壺の底部かと思われる。

図31には石器を示した。2が遺物包含層直下のＬＶ出土である以外はＬＩから出土したものである。1～5には石鏃を図示した。1は流紋岩製の有茎石鏃である。2は白色の石英を素材とした平基石鏃である。3は流紋岩製の平基石鏃の基部である。4・5は未成品と思われる。4は流紋岩で，裏面に素材の剥離面を残し，表面も素材の形状が残存し，左側に段が見られる。基部が破損したために廃棄したものと思われる。5は半透明の石英製で，尖頭部が作出されているが，厚みが残存し，形状も整っていない。6・7は磨石である。6は断面多角形を呈するもので，平坦面に凹みが認められる。7は亜円礫を用いたものである。いずれも花崗岩類を素材とする。

第3章　ま　と　め

第1節　沢目木B遺跡出土遺物の特徴

1．出土土器の概要

今回の調査では，遺物包含層およびそれよりも新しい時期に形成された沢跡が確認できた。ここでは，出土土器の特徴についてまとめてみる。

遺物包含層では，縄文時代晩期の遺物が主体を占め，これらをⅠ～Ⅲ類の精製土器およびⅣ類とした粗製土器に分類した。Ⅰ類は羊歯状文が特徴となるものであり，晩期前葉の大洞ＢＣ式に比定される。Ⅱ類は体部上端の沈線間に刺突が施されており，晩期中葉大洞C_1式期の半精製土器と考えられる。Ⅰ類については，表３に示したとおり量的にかなり少ないものであり，Ⅱ類については，確認できたのは図10－７の１点のみである。

精製土器の中で主体となるⅢ類は，口縁部に大小の突起による装飾がなされ，沈線施文の雲形文およびその派生文様が描かれる。体部地文として網目状撚糸文が多用される。これについては，晩期中葉の大洞C_2式期の土器に比定される。

粗製土器のⅣ類は数的に最も多く出土しており，文様としては櫛歯文，撚糸文，網目状撚糸文，縄文，条痕および無文のものが認められた。このうち櫛歯文が施される粗製土器については，複合口縁となるものがなく，口縁部がほぼ直立し内湾しないなど，他の文様が施されるものとは異なる特徴を持っている。数量としては，重量比率で１％を占めるのみであり，かなり少ない。この種の文様は縄文時代後期から認められるものであり，果たして遺物包含層からは後期の土器も出土している。しかし，今回の調査で出土した後期の土器はかなり摩滅しており，対して櫛歯文が施される粗製土器に摩滅はほとんど認められない。表３に示した数値からは，重量比率および層位別の出土量などが晩期前葉の精製土器に近い特徴を示していることが読みとれ，おそらくはⅠ類土器に伴う粗製土器である可能性が高いと考えている。これ以外は出土量および出土状況，撚糸文・網目状撚糸文が卓越するなどの特徴からⅢ類土器に伴うものと考える。

沢跡においても上記の晩期Ⅲ・Ⅳ類が主体となっているが，これらに後続する土器の出土も認められる。これらは，口縁部もしくは文様帯の上側にⅢ類に見られるメガネ状付帯文から変化した貼付文が施され，浮線文や工字文，綾杉状の沈線文などの文様が描かれている。須賀川市一斗内遺跡のⅡ期６・７段階の土器と同類と思われ，晩期後葉大洞Ａ式期の土器に比定される。

これら以外には，早期前葉～中葉の無文土器・田戸上層式，早期後葉～末葉の条痕文系土器，前期前半期の土器が出土しており，これらについては隣接する西田Ｈ遺跡において住居跡に伴って多く出土している。また，後期末葉～晩期初頭の新地式～大洞B_1式に位置づけられるものも僅かにであるが出土している。

2．大洞C$_2$式期土器について（図32・33）

今回の出土土器中の主体である大洞C$_2$式期の土器の特徴について述べる。図32・33に示した今回出土した大洞C$_2$式土器の集成図に沿って述べていく。

まず，晩期Ⅲ類とした精製土器の特徴についてまとめておく。全体の特徴を挙げれば，大型品は少なく，器高が20cmに満たない小型品が多い。文様帯地文には単節縄文を横回転により施し，体部地文は単軸絡条体第1類および第5類の縦回転による撚糸文・網目状撚糸文が施されるものがほとんどである。原体の縄は単節縄文，撚糸文いずれも左撚りであることが多い。

文様については，藤沼邦彦の分類に従えば，配置文を基準として連続文様を描くもの，区画文を基準として単位文様を描くものがあり（藤沼1989），さらに陽影的入組文様と事実報告中で称したものの3種がある。C字文や三叉文などを配置して文様を描くものは，地文縄文の磨消が不完全で縄文帯と無文帯の区別が明確でない。そのため，沈線によって描く配置文自体が文様のパターンとして連続しているような印象を受ける。C字文の端部は鋭角に折り返され，内部に充填されるノ字文も鉤手状に曲がっているのも全体的な特徴と言える。単位文様を描くものは，半楕円を上下に重ねたような形状に縄文帯を残すもののみが認められる。おそらくは，藤沼邦彦のいう「区画文C1」を基準とした単位文様から変化したものと思われるが（藤沼前掲），ここにさらに充填文を施すものは25のみである。また，事実報告中で陽影的入組文様と表現したものも相当量出土している。これは，狭い間隔に太い沈線で三叉文やC字文を入り組ませて描くことによりその間隙が陽影的に見えるものである。文様の割付は，突起によって分割される単位とは合わずに26や33のように若干ずれが生じているものや，32のように隙間が空いたために不完全な配置文を充填しているようなものも認められる。刺突を加えた沈線上に施される小瘤も突起と若干ずれた位置に施されていることが多い。また，文様帯の区画線も上下に緩く蛇行して文様帯幅が一定でないものが多い。

今回確認できた器種としては，短頸壺とした頸部の短い広口壺，長胴壺，深鉢，台付鉢，浅鉢，鉢が復元されている。その他に破片で注口土器，鈎手土器なども認められるが，形態，文様構成などが不明なためここでは触れない。

短頸壺は，3～5の高さ10cm程度の小型品が多く，1のような25～30cm程度の大型のものもある。4単位の大型のA突起，小型のB突起を施し，大型品の場合はその間にさらに小型のB突起を付している。文様は1・2の三叉文および3の「一斗内型配置文」（仲田1994）などの連続文様が主体をなし，その他に4の楕円を上下に重ねた単位文様，5の陽影的入組文様も認められる。文様帯の上部に刺突を加えた沈線を一巡させるものが多く，小瘤を貼り付けるものもある。

長胴壺は，復元品が少なく全体像の確かなものがないが，高さ20cm以下の小型品が多い。7・8のような口縁に4単位の大突起のみ付すものと図16の破片資料のような大・小の突起を付すものの2種が認められる。文様帯の上部には刺突を加えた沈線を一巡させ小瘤を貼り付けるものもある。文様は陽影的入組文様が主体となる。この文様は図16－16など破片に見られるC字文の入組文や7

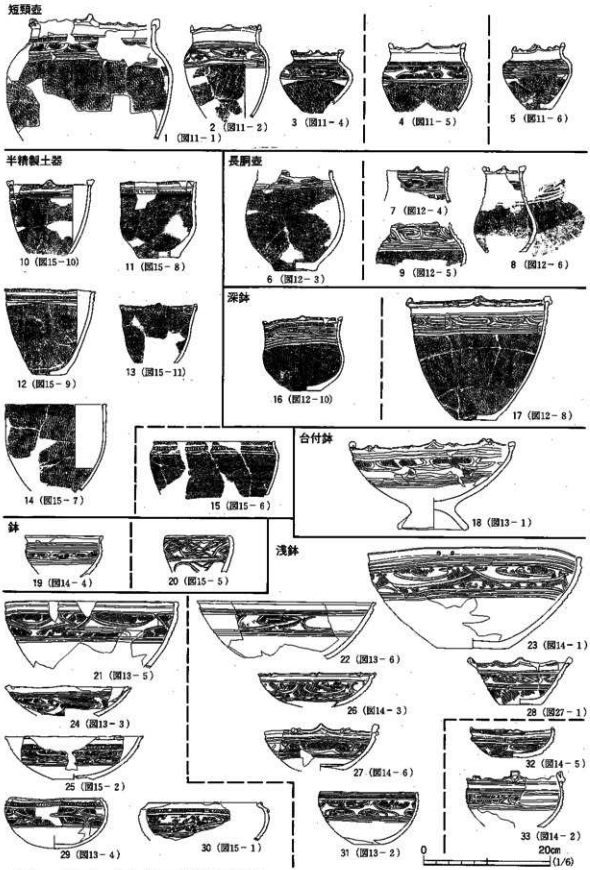


図32　沢目木B遺跡出土土器集成図（1）

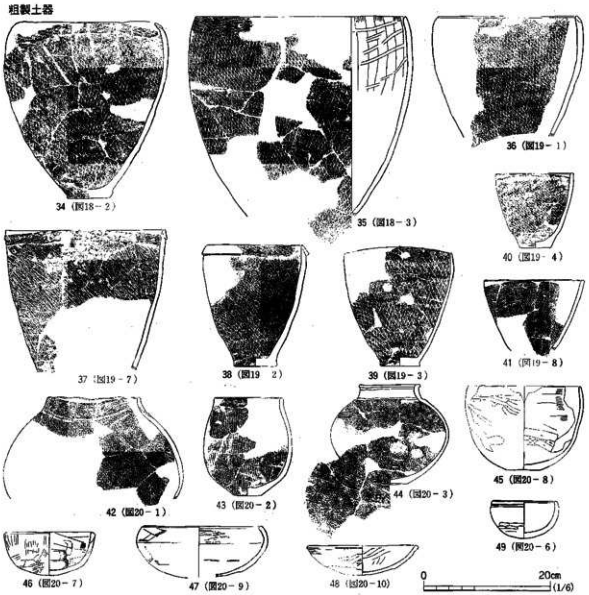


図33　沢日本B遺跡出土土器集成図（2）

の配置文から変化したものと思われ，これらの破片資料は復元個体よりも古い可能性を持っている。

深鉢は，精製土器の量が少なく，半精製土器に多く認められる。基本的な形態は外傾気味の口縁部から底部に向かって緩やかに内湾しながらすぼまる器形である。文様については，復元できたものは陽彫的入組文様であるが，破片としてはC字文の配置文様も存在している。また，16は深鉢としたが，最大径は体部の半ばにあり，上部が窄まる器形となっており，広口壺とした方が良いかもしれない。文様は右下がりのS字の区画文のみが施されている。

半精製土器については，11・12・14のような平縁で体部との区画に刺突を加えた沈線を用いるものと，10・13のような口縁部に突起を有し，体部に擬似縄文を施すものの2種が確認できる。擬似縄文は，節の内部が複節状もしくは馬蹄形に割れている。オオバコの回転文と思われる。

台付鉢は，18に示した鉢部が浅鉢のもの1点が復元されている。15に示した半精製土器も底部が

欠損しており断言はできないが，その可能性がある。

鉢としては19・20の小型品がある。19には三叉文，20には粗雑な入組文様が描かれている。

浅鉢は，21～23のような口径30cm前後の大型品と24～33のような口径15cm前後の小型品がある。文様としては，図の左側に示した区画文および充填文による単位文様を描くものと右側に示した鉤手状のノ字文を付した上向きC字文を配置するものとがある。大型品については，21・23の口縁が若干内湾するものと22の外傾して皿状となるものがある。小型品については24～28の皿状と29～31の椀形の器形が認められる。皿状の器形のものについてはいずれも口縁部に突起を有する。28は他と器形が異なり平底の底部から体部が直線的に開く器形である。これ以外は丸底状の底部から体部が内湾して立ち上がる。24は単位文様が描かれる文様帯が底部付近まで続いており，大洞C_1式期の浅鉢に近い要素を持つ。25のみが刺突を加えた沈線を一巡させ小瘤を貼り付けている。椀形のものについてはいずれも刺突を加えた沈線を文様帯の上部に一巡させている。

右下の32・33はこれらよりも新しい要素を有するものである。32にはメガネ状付帯文もしくは連鎖文と呼ばれる横位の単沈線を持つ貼付文が文様帯の上に施され，文様帯は体部下半に位置している。配置文の描き方も26・27の描き方に比べて単純化し，の字状になっている。33は大突起・小突起の形状も変化し，配置文様もH字状のもはや雲形文とは言い難い文様が描かれる。この2点の位置付けとしては，後続する大洞A式期土器への変化途上の土器であろうと捉えている。しかし，遺物包含層中に大洞A式期の土器が見られないこと，出土層位がLⅢ下部・LⅣ上面が主体となることなどから，その他の土器と時間差がほとんどない，もしくは全くないものと考えられる。

以上が各器種の特徴であるが，短頸広口壺には三叉もしくは「一斗内型」の配置文様，長胴壺・深鉢には陽彫的入組文様が主体的に用いられ，鉢類には単位文様とC字の配置文様が描かれることが多い。このように器種によって用いられる文様に違いがあることも特徴として挙げておく。

次に，擂歯文を除いたⅣ類土器については，34～41の深鉢，42～44の短頸壺とした広口の壺，45～49の浅鉢，鉢がある。深鉢，短頸壺には単軸絡条体第5類による網目状撚糸文が施されるものが多く，浅鉢，鉢は無文のものが多かった。深鉢は，口縁が内湾して体部上半が膨らみ，底部に向かってすぼまっていく器形が大半を占める。口縁部は輪積みを残して複合口縁にするものも多い。または，39のようにナデを加えて一段凹ませた口縁部無文帯を造り出すものも認められる。短頸壺は，口縁部に突起が付かないだけで，精製土器と同様の器形を持つ42・44と，体部の膨らみの小さい43がある。44のように肩部に羽状縄文を施し体部下半に網目状撚糸文を施すものなどは，精製土器の短頸壺の文様帯部分に単節縄文を施す方法に則っているようである。浅鉢も精製土器同様，椀形，皿形が認められる。逆に45に示した無文鉢のような器形は精製土器には見られない。

これらの土器には炭化物の付着しているものが目立つ。精製土器の短頸壺・長胴壺・深鉢いずれにも炭化物の付着が認められ，特に半精製深鉢には顕著に付着している。粗製土器であるⅣ類土器においても大型・小型の別を問わず，ほぼ同様の状況である。これらの炭化物付着位置は，内面は口縁部から体部の半ばまで，外面は口縁部から体部下端まで付くものも認められる。明らかにこれ

らの炭化物は，内面がおこげ，外面は噴きこぼれと考えられる。逆に煮炊きに使用しないであろう赤色塗彩が施された土器は，5の短頸壺に若干痕跡が認められるだけである。このことから，これらの土器のほとんどが煮炊きに使用されてしまっていると考えて差し支えないだろう。

これらの土器の編年的位置付けであるが，破片資料の中には古い様相を持つものも含まれているが，復元資料の多くは概ね三島町荒屋敷遺跡第Ⅱ群Ⅲ・Ⅳ類に類似，須賀川市一斗内遺跡Ⅱ期5段階の土器とほぼ同様である。よってこれらの土器に近い，大洞C_2式期の新しい段階に位置付けられるものと考えている。

3．石器・石製品について

今回の調査で出土した石器の器種別点数を表4に示した。大多数を4㎝に満たない小型の剥片が占め，石鏃がこれに次ぐなど，小型の剥片石器が他を圧倒している。剥片石器の石材は白色～赤褐色を呈する流紋岩が主体をなし，デイサイト質凝灰岩が若干認められる。また，頁岩，黒曜石，透明度の高い石英なども利用されている。石鏃の形態は，無茎凹基のものが多く，有茎石鏃もある。石鏃未成品と思われる素材の厚みが残る物や不整な形状なもの，二次加工のある剥片，小型の残核も相当数認められる。その他に，磨石には花崗岩の類を用いている。装飾品や祭祀具に利用される石製品は，石刀・滑石製の玉類が幾つか認められるのみで少ない。

これらの特徴は，いずれも隣接する西田H遺跡と同様の傾向である。西田H遺跡では，晩期に属する25号住居跡で流紋岩の剥片が多量に出土し，この石材を晩期に重用されたものとしている。デイサイト質凝灰岩製の石器については早・前期に属する可能性が指摘され，対岸の堂田A遺跡では実際に早期の住居跡に伴って多量の同石材の剥片が出土している。今回，晩期の遺物包含層からこの石材が出土していることから晩期においても若干利用されていることがわかった。

4．ま　と　め

今回の調査で出土した土器については，縄文時代晩期中葉大洞C_2式期の土器が中心となる。それ以外には，晩期前葉大洞BC式および晩期後葉大洞A式期までの土器があり，ごく僅かに縄文時代早・前期および後期末葉新地式～晩期初頭大洞B式の土器が出土する。直前の大洞C_1式土器の出土量も少なく，この遺跡が晩期前葉以降継続して利用されていたわけではなく，断続的に利用される中で，大洞C_2式期のみに突出して利用されていたものと思われる。特に遺物包含層については同型式期の新しい段階に形成されたものと判断され，この段階の一括資料と考えられる。

表4　出土石器器種別点数

	石鏃	石錐	打製石斧	磨製石斧	磨石類	剥片	二次加工ある剥片	微細剥離ある剥片	石核	残核	石製品	計
遺物包含層	51	6	1	1	1	1,013	39	1	3	18	5	1,139
沢跡	8	1	0	1	3	59	8	2	3	6	2	93
遺構外	3	0	0	0	4	129	1	0	1	3	1	142
器種別計	62	7	1	2	8	1,201	48	3	7	27	8	1,374

第2節 沢目木B遺跡の総括

1．地形の変遷

今回調査した沢目木B遺跡は，第1章第4節で述べたように黒森川の支谷に位置しているが，調査の結果，原地形は黒森川の造り出した谷底低地およびそれに面する丘陵小尾根であったことがわかった。この丘陵は現在では，西から流れ込む沢によって南側の丘陵尾根と画されているが，今回の調査からこの沢自体は平安時代よりも新しい時期に形成されたものであったことが判明した。また，北側に隣接する西田H遺跡との間も現状では水路によって画されている。この部分には，西田H遺跡の調査時に縄文時代早期の土器を含む土・砂によって埋められた旧流路が確認されており，また，平成16年度に行った試掘調査時にも埋没沢が確認されている（福島県内遺跡分布調査報告11)。縄文時代からこの流路は存在しており，西田H遺跡が所在する丘陵との間を画していたと考えられる。これらのことから，遺跡は南側の丘陵尾根から派生した小尾根上に立地していたと考えられる。

今回確認した遺物包含層はこの小尾根の黒森川に面した斜面に形成された窪地に堆積している。この窪地は黒森川の蛇行によって抉られた湿地および急斜面に，崩落土の堆積，浸食が繰り返されながら形成されたものである。この窪地が遺物包含層によって埋められた後も黒森川による浸食が繰り返され，さらには西から沢が流れ込むようになる。その後の水田造成，さらなる圃場整備によって現況のような地形になったものと考えられる。

2．遺跡の形成

今回検出された遺物包含層は，縄文時代晩期中葉の大洞C_2式期に形成されたものであるが，同時期の集落が北に隣接する西田H遺跡で検出されている。

西田H遺跡では，縄文時代早・前・晩期および平安時代の集落が確認されている。このうち晩期の遺構数は，住居跡5軒，掘立柱建物跡7棟，土器埋設遺構2基，土坑1基である。これらの遺構と本遺跡の位置を図34に示した。

住居跡5軒はいずれも丘陵尾根上で検出され，このうち22・25・28号住居跡が大洞C_2式期に位置付けられている。その他の遺構は本遺跡と流路を挟んだ対岸にあたる丘陵裾部で検出され，埋設土器の年代，遺構内および遺構周辺の堆積土から出土する土器の年代から同じく大洞C_2式期に比定されている。この裾部の遺構群については，土器埋設遺構などの存在から祭祀域ではないかと推測している。遺物包含層出土遺物の内容についても本遺跡とほぼ同様で，大洞C_2式が大多数を占め，後期末葉および大洞BC式が少量出土している。また，前節で述べたように石器・石製品の特徴も非常に似通っている。

このように両遺跡の遺構の時期および遺物の時期，出土割合をはじめとするその諸特徴は，ほぼ

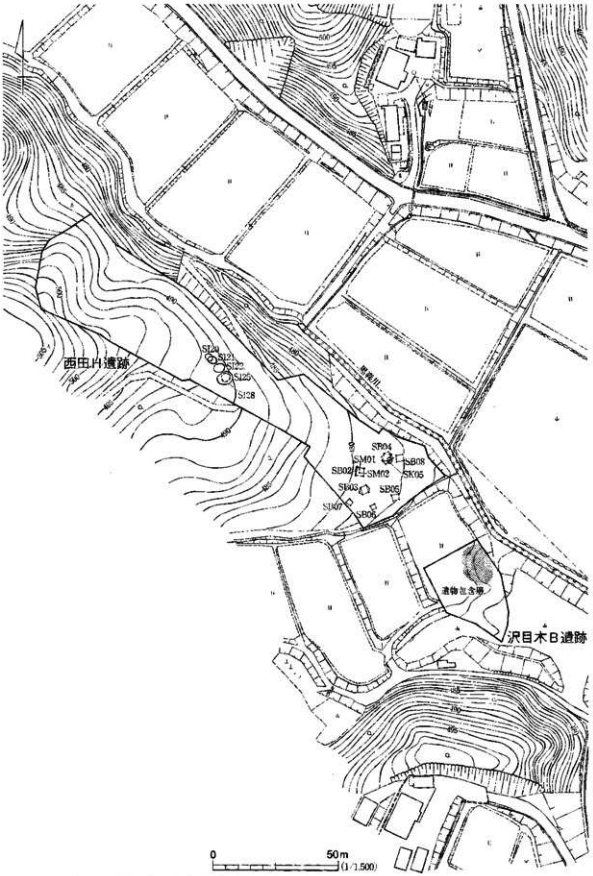


図34　西田H・沢目木B遺跡晩期遺構配置図

同様であり，西田H遺跡と今回調査した沢目木B遺跡は同一遺跡と考えて良い。西田H遺跡で極めて多量に出土した早・前期の土器が本遺跡では少ないことは，この時期の集落域が本遺跡側まで及んでいなかったことを示し，逆に晩期の集落は，本遺跡の所在する小尾根上まで及んでいたと考えられる。この両遺跡にまたがる集落の住人が今回調査した遺物包含層とした捨て場を形成したのである。おそらく本遺跡側にも住居跡その他の遺構が構築されていたのであろうが，近年の削平によって失われ，斜面上に位置したこの捨て場のみが残存したのであろう。さらに想像を逞しくすれば，流路および対岸の丘陵裾部の祭祀域を挟む形で，居住域があったと考えることも出来よう。

3．ま と め

西田H・沢目木B両遺跡は，現在のところ晩期の住居跡が5軒しか検出されていないものの，掘立柱建物跡や土器埋設遺構が伴っていること，今回検出された捨て場内の遺物量から考えて，小規模な集落であったとは考え難い。同河川流域で確認されている同時期の集落に，竪穴住居跡2軒が確認された反田B遺跡があるが，こちらは山間の支谷に面した斜面上に形成された小集落である。西田H・沢目木B両遺跡はこれよりも明らかに規模が大きいと想定され，この流域における中心的集落として機能していたことが窺える。この遺跡の立地を考えれば，谷底平野を形成するような中心河川である黒森川とその支流の合流点を望む丘陵緩斜面に位置しており，阿武隈高地中部の山間部における大洞C_2式期の集落選地条件として，このような立地が挙げられるであろう。

また，晩期前葉・後葉に帰属する土器も出土しているものの，これらの時期の遺構は未確認である。このことから，本遺跡を含めたこの縄文時代晩期の遺跡は，前後に継続することのない晩期中葉大洞C_2式期の単一時期の集落跡と判断される。

第3節 こまちダム遺跡発掘調査の総括

こまちダム建設に関連した埋蔵文化財の調査は，平成10年に開始され今年度で終了となる。この間に沢目木，西田H，堂田A，反田C，沢目木Bの5遺跡において発掘調査を行っている。これらの遺跡の発掘調査では，主に縄文時代と平安時代の遺構・遺物において成果が挙がっている。特に，縄文時代においては，早～前期および晩期の集落跡である西田H遺跡をはじめとして大きな成果を得ている。また，平成10～14年度にはあぶくま南道路関連の発掘調査によっても同地区の7遺跡が発掘調査されている。この流域における開発行為はしばらく行われないものと思われ，現在までにわかっている範囲で黒森川流域における遺跡の特徴をまとめてみる。

1．各遺跡の立地

まず，各遺跡の立地を再確認してみる。こまちダム関連遺跡については図2を，それ以外は図4を参照していただきたい。

こまちダム関連で調査された遺跡は，西方の山地を源とする黒森川の上流域にあたり，谷底低地に流れ出た部分に位置している。集落が確認された沢目木，西田H・沢目木B，堂田A遺跡はいずれも谷底低地を望む緩斜面上に位置している。南岸に所在する沢目木遺跡は北に向かって流れる黒森川支流が開析した谷底平野を望む丘陵裾部緩斜面，同じく西田H遺跡・沢目木B遺跡はその支流と黒森川の合流点を望む丘陵緩斜面から低地にかけて位置している。北岸に所在する堂田A遺跡は谷底平野を望む丘陵南裾の谷間に所在する。一方，土坑3基のみが確認された反田C遺跡はこれらよりも下流寄りの谷底平野が一旦途切れる部分にあたる南岸の丘陵斜面に位置している。

一方あぶくま南道路関連の調査では，中流域の柳作A・B・C，鹿島，反田Bの5遺跡を調査している。この付近では，上流域で一旦途切れた谷底低地が再び広がり，南北に幅広の支谷が入り込む地形となる。いずれの遺跡も谷底低地に南北から入り込む支谷に面した場所に立地している。縄文時代の集落が確認された柳作B遺跡が支谷と黒森川の谷底低地に挟まれた丘陵尾根上に位置する以外は，いずれも丘陵裾部緩斜面に位置する。

また，関場B，仁井殿の2遺跡は同地区に所在するものの，河川流域としては1つ南の十石川流域に属する。西田H遺跡付近から南に入る支流が形成した谷と谷頭が対向するように，十石川支流の形成した谷が北向きに入っており，その支流と本流の合流点を望む地点に位置する。仁井殿遺跡は西側の丘陵尾根上，関場B遺跡が東側から入る支谷の谷戸頭に立地する。

2．各時期の様相

縄文時代早期前葉　調査された中において最も古いものは，早期前葉撚糸文式土器期のものである。西田H遺跡では夏島式～稲荷台式期に属する17号住居跡が検出されている。遺物包含層中からは夏島式～稲荷台式，いわゆる薄手無文土器，撚糸文式末期の無文土器が出土している。沢目木遺跡では，撚糸文式末期の無文土器を伴う1・2号竪穴状遺構が確認されている。西田H遺跡17号住居跡は隅丸台形の掘込に数個の柱穴に加えて，炉跡を伴っており，本県内の事例としては特殊なも

表5　黒森川流域の遺跡時期一覧

のといえる。沢目木遺跡１・２号竪穴状遺構については円形の掘込のみ確認できるもので，これがこの時期の小型住居か否かについては資料の増加が待たれる。

縄文時代早期中葉　早期中葉についても西田H遺跡で比較的多く出土している。確実なものではないものの，５軒がこの時期の住居跡である可能性が指摘されている。遺物包含層出土土器でも，初期貝殻沈線文土器に無文土器と日計型押型文が伴う可能性が指摘されているほか，田戸下層式，田戸上層式なども出土している。このほかにこの流域では，柳作B遺跡で日計式など，鹿島遺跡で田戸上層式が出土している。

これらに後続すると考えられる常世１式の時期には，流域全体で出土量が増加する。西田H遺跡における前述の５軒のうち７号住居跡は，この時期のものに比定される。堂田A遺跡では，６軒の竪穴住居跡がこの時期に比定されている。また，柳作B遺跡においても同時期の土器が出土している。西田H遺跡・堂田A遺跡ともに，谷底低地に近い丘陵の裾部において住居跡を確認しており，この時期の特徴と考えられる。また，これらの遺跡から出土する常世１式土器は，いずれも絡条体圧痕文が多用され，地文条痕文も認められる比較的新しい時期とされるものであり，この時期に黒森川流域の利用が活発化したと考えられる。

縄文時代早期後葉　この時期においては，堂田A遺跡で槻木１式期と考えられる住居跡が３軒検出されている。西田H遺跡でも野島式，槻木１式が出土し，その他に柳作A遺跡，鹿島遺跡などでも同時期の小破片が出土している。続く鵜ヶ島台式期の土器については，いずれの遺跡でも出土しておらず，断絶期となる。

茅山下層式以降早期末葉に至るまでの時期は，いずれの遺跡でも土器が出土している。西田H遺跡は，この流域において中心的に利用された集落と考えられ，住居跡10軒がこの時期に比定されている。遺物も極めて多量出土し，その内容も内外面条痕文土器，いわゆる北前式と関連する縄文条痕文土器，常世２式と関連する絡条体条痕・絡条体圧痕文土器，大畑G式，日向前B式など多様な土器が出土している。堂田A遺跡では大畑G式のみが出土する住居跡６軒が確認されている。また，流域は異なるが，仁井殿遺跡でも同時期の住居跡２軒と西田H遺跡と同内容の土器が確認されている。いずれの遺跡とも丘陵斜面に方形を基調とした不整形の掘込を持つ住居跡が構築されている。特に堂田A遺跡では，著しい重複を持ちながら構築されている状況が確認されている。

この時期には黒森川流域だけに止まらず，この流域も含んだ阿武隈高地中部においても多数の遺跡が発見されており，この地域全体において活発な活動が行われていたものと推測される。この黒森川流域においても，西田H遺跡を中心的に利用しながら各箇所を活発に移動して生活していた状況が窺える。

縄文時代前期　前期前半において遺構が確認されたのは，西田H遺跡だけである。初頭の花積下層式，前葉の大木１式および関山Ⅱ式，大木２ａ式の各時期の土器が出土し，同時期の住居跡10軒が確認されている。住居跡はいずれも丘陵尾根上に著しく重複しながら構築されている。住居跡の形態は小型の隅丸方形のもの８軒と，長辺７ｍ程度とやや大型の隅丸長方形のもの２軒があり，大

型のものは大木2ａ式期に比定されている。他方でこの時期の土器が出土した遺跡も少なく，堂田Ａ遺跡・鹿島遺跡で花積下層式，仁井殿遺跡で大木1式，沢目木遺跡で大木2ｂ式が確認されているだけである。黒森川流域での活動は早期に比して低下傾向にあるか，各所に展開していた集落が西田Ｈ遺跡に集約されたものと考えられる。

前期後半に至って，それまで中心であった西田Ｈ遺跡において住居跡は検出されず，落し穴状土坑7基がこの時期のものと推測されている。一方，沢目木遺跡で大木4式，浮島Ⅲ式，諸磯ｂ式が伴出し，その他に大木6式の出土も認められる。柳作Ｂ遺跡においては，大木3式期の住居跡4軒で構成される集落が確認され，ここから浮島Ⅰ式なども伴出している。その他では，仁井殿遺跡で浮島式，鹿島遺跡で大木6式などの出土が見られる。この時期には，集落選地の変化も認められるとともに，浮島式土器など関東系土器の流入が顕著に認められる。

縄文時代中・後期　中期においては，調査で確認された遺構・遺物は少なく，黒森川流域で確認されているのは，反田Ｂ遺跡における大木9式の土器埋設遺構2基だけである。後期においても同様で，末葉の新地式が西田Ｈ・沢目木Ｂ両遺跡で僅かな量が確認されているに過ぎず，反田Ｃ遺跡でも若干後期の粗製土器が出土しているが，正確な帰属時期は不明である。

未調査遺跡も含めて考えれば，十石川流域に堀切遺跡がある。表面採集される遺物の質・量から当該期の大規模な集落と想定される。この遺跡は前述の合流点を望む段丘上に所在しており，段丘の形成が未発達な黒森川流域においては，規模の大きい集落は存在していないのではないかという推測が成り立つ。

縄文時代晩期　西田Ｈ遺跡において住居跡5軒，掘立柱建物跡7棟，土器埋設遺構2基，土坑1基が検出され，今回調査した沢目木Ｂ遺跡では，捨て場と考えられる遺物包含層が確認されている。いずれも大洞C_2式期に位置付けられ，この時期の拠点的集落と考えられる。これ以外には，反田Ｂ遺跡で大洞C_2式期の竪穴住居跡2軒が検出されている。いずれの遺跡も周辺時期の土器は少量出土しているのみで遺構は未確認である。これ以外に土器のみ出土している遺跡では，流域が異なるものの関場Ｂ遺跡があり，これも大洞C_2式期と思われる網目状撚糸文土器が出土している。このように，黒森川流域において大洞C_2式期に集落が形成され，この地区全体で活動していた状況が窺える。

弥生・古墳時代　流域における活動の痕跡は乏しい。沢目木遺跡・西田Ｈ遺跡で弥生時代前期御代田式の破片が出土しているのみで，その他は皆無である。これらの報告書中では，沢目木遺跡の掘立柱建物跡2棟，西田Ｈ遺跡の掘込の確認できない5軒の住居跡について，この時期のものである可能性が指摘されているが，不確実である。古墳時代に至っては，調査で遺構・遺物はともに確認されていない。

奈良・平安時代　奈良時代末期および平安時代初期になって再び遺跡数が増加する。集落が形成される遺跡はいずれも丘陵裾部の緩斜面に立地する。それ以外の大半の遺跡でも土師器片などの出土が認められ，この時期には広範な範囲で人々が活動していたことが窺える。

堂田A遺跡では，9世紀前半に位置付けられる竪穴住居跡4軒が検出されている。同時に墨書・刻書土器が他に比べて多く出土しており，他所に比べて異なる特徴を持っている。西田H遺跡では8世紀末葉～9世紀前半に比定される住居跡3軒，掘立柱建物跡1棟が確認されている。重複関係からごく短期間における2時期の集落変遷が想定されている。中流域の鹿島遺跡では9世紀前半に位置付けられる竪穴住居跡2軒が検出される。柳作A・C両遺跡は，同一集落を形成しているものと考えられ，柳作A遺跡で竪穴住居跡1軒，柳作C遺跡で竪穴住居跡3軒，掘立柱建物跡4棟が確認されている。8世紀中葉，8世紀末葉～9世紀初頭，9世紀前葉の3時期の集落変遷が考えられている。

これらの遺跡は，いずれも8世紀半ば以降に形成されたものであり，9世紀前半に途絶えるという共通した特徴を持っている。さらに，各集落とも1時期における住居跡の軒数は少なく，能登谷宣康が鹿島遺跡報告中において指摘する「丘陵裾部の狭い平坦地に小規模集落ないしは各戸ごとに散在的に居住していた」状況が窺える。石本弘は柳作C遺跡報告中において，夏井川支谷に形成された奈良時代以前から継続しない集落に対して「開拓村落」という評価を与えている。調査されたこれらの小集落はいずれもこのような性格を持ったものと考えられ，8世紀半ば～9世紀前葉の時期に流域全体において農地開拓が行われていたものと想定される。

引用・参考文献

小野町　1992『小野町史　通史編』
小野町　1987『小野町史　資料編Ⅰ（上）』
小野町教育委員会　1998『こまちダム関連遺跡群分布調査報告書』
仲田茂司　1994『福島県田村郡三春町　西方前遺跡の縄文土器』三春考古学研究会
福島県農林水産部農地計画課　1996『土地分類基本調査：小野新町』
藤沼邦彦　1989「亀ヶ岡式土器の文様の描き方－雲形文を中心として」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
三島町教育委員会　1990『荒屋敷遺跡Ⅱ』

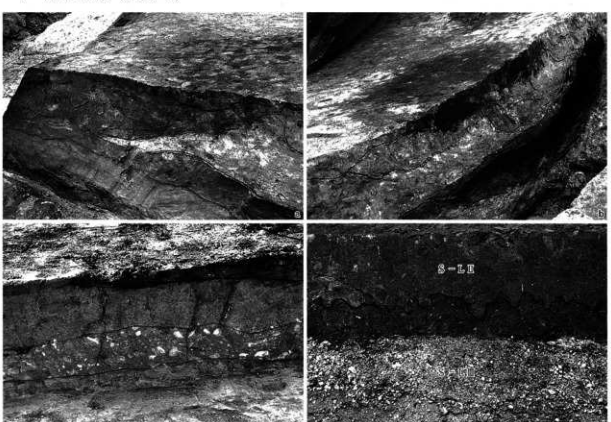
福島県教育委員会・福島県文化振興事業団（福島県文化センター）発行
1984「一斗内遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告16』
1999「柳作A遺跡」「柳作B遺跡」「柳作C遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4』
2000『福島県内遺跡分布調査報告6』
2001『福島県内遺跡分布調査報告7』
2002『福島県内遺跡分布調査報告8』
2002「鹿島遺跡」「反田B遺跡」「関場B遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告16』
2003『福島県内遺跡分布調査報告9』
2003「沢目木遺跡」『こまちダム発掘調査報告1』
2004『福島県内遺跡分布調査報告10』
2004「仁井殿遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告17』
2004「反田C遺跡」「沢目木遺跡（2次調査）」『こまちダム発掘調査報告2』
2005『福島県内遺跡分布調査報告11』
2005「堂田A遺跡」「西田H遺跡」『こまちダム発掘調査報告3』

写　真　図　版

1　調査前遠景（平成17年４月）（東から）

2　調査前近景（平成16年７月）（東から）

3　調査区全景（南東から）

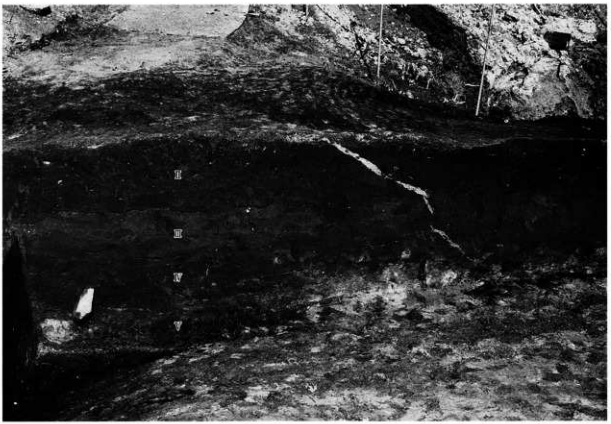


4　基本土層

a　A－A′下部（北西から）　b　A－A′中部（北から）
c　B３グリッド壁面（東から）　d　沢跡（南東から）

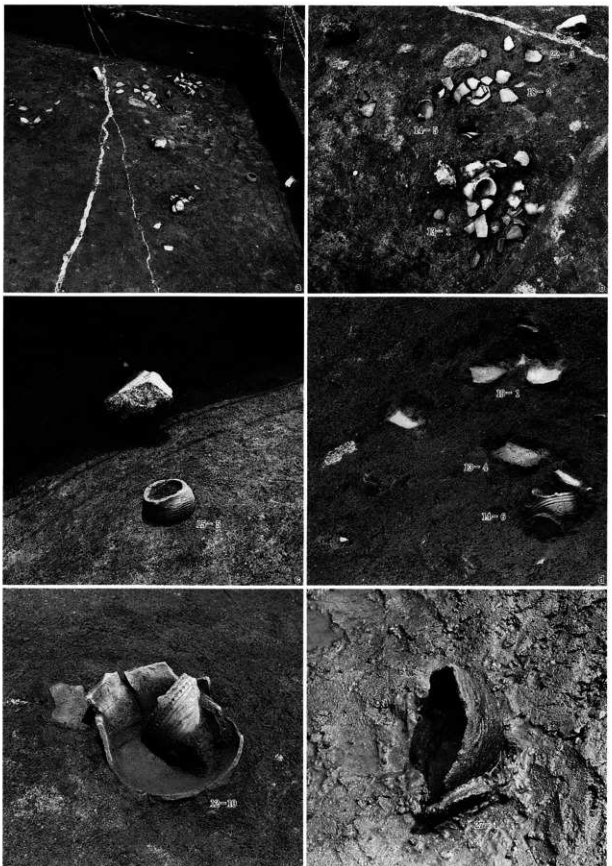
5　遺物包含層検出状況（東から）

6　遺物包含層Ｆ３グリッド土層（北から）



7　遺物包含層Ｆ２グリッド土層（西から）

8　遺物包含層完掘状況（南東から）



9　遺物出土状況

a　遺物包含層ⅠⅣ上面（南から）
b　F3グリッドⅠⅣ上面（北東から）
c　G4グリッドⅠⅣ上面（北西から）
d　F4グリッドⅠⅣ上面（北西から）
e　F3グリッド（南東から）
f　沢跡（北から）

11－1

11－2

11－4

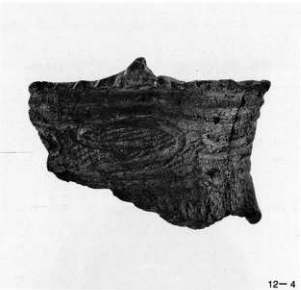
11－5

11－6

12－6

10　出土土器（1）

12－3


12－4

12－5

12－8

12－10

13－1

11　出土土器（2）

13－3

14－6

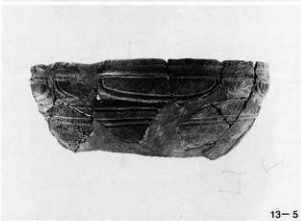
14－3

14－5

12　出土土器（3）

13－2

13－4


13－5

14－1

14－2

14－4

15－1

15－5

13　出土土器（4）

15－6

15－7

15－8

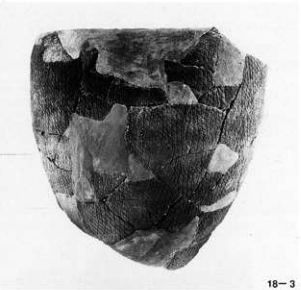
15－9

15－10

15－11

14　出土土器（5）

18－1


18－3

18－2

19－2

19－3

19－4

15　出土土器（6）

19－5

19－7

19－8

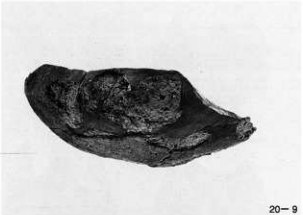
20－8

20－3

12－1

16　出土土器（7）

15－2


20－9

20－10

20－6

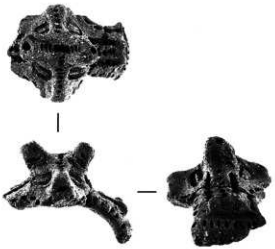
10－8

10－7

22－1

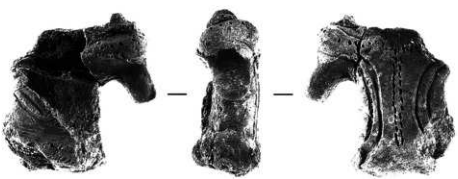
27－1

17　出土土器（8）



17−23

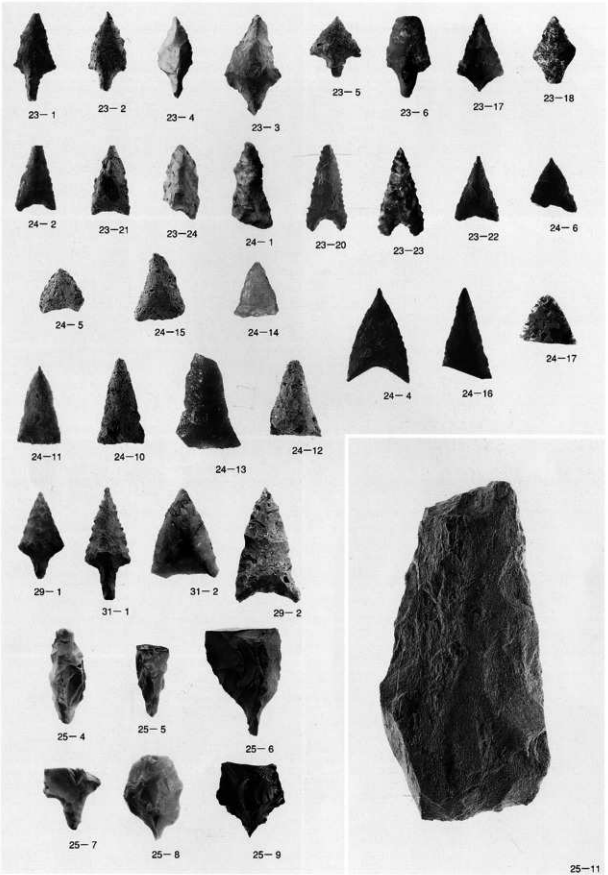
22−10



22−6

22−9

18 出土土器・土製品


23－1
23－2
23－4
23－3
23－5
23－6
23－17
23－18
24－2
23－21
23－24
24－1
23－20
23－23
23－22
24－6
24－5
24－15
24－14
24－4
24－16
24－17
24－11
24－10
24－13
24－12
29－1
31－1
31－2
29－2
25－4
25－5
25－6
25－7
25－8
25－9
25－11

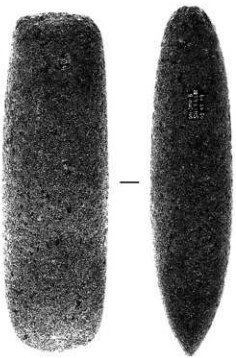
19　出土石器

26－2

29－8

31－7

29－9



26－3

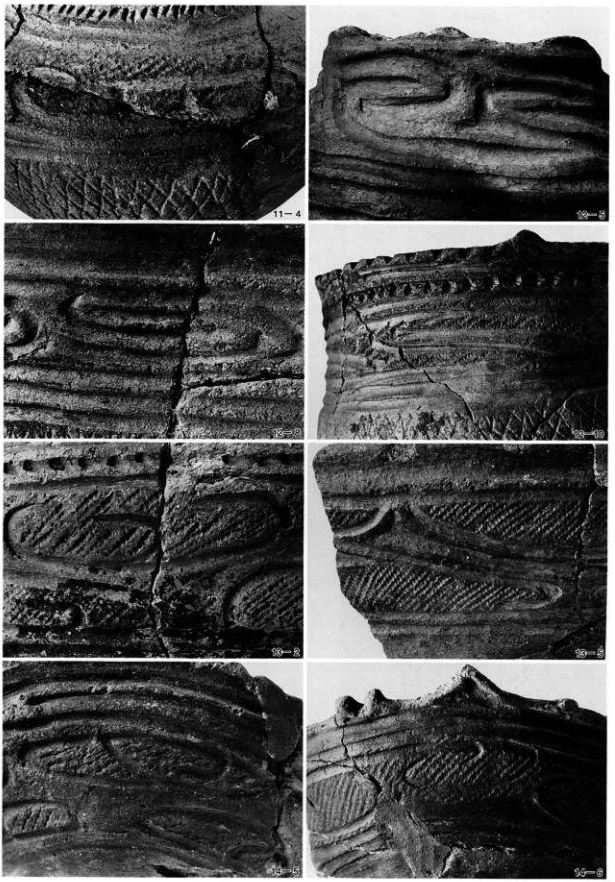
26－4

26－5

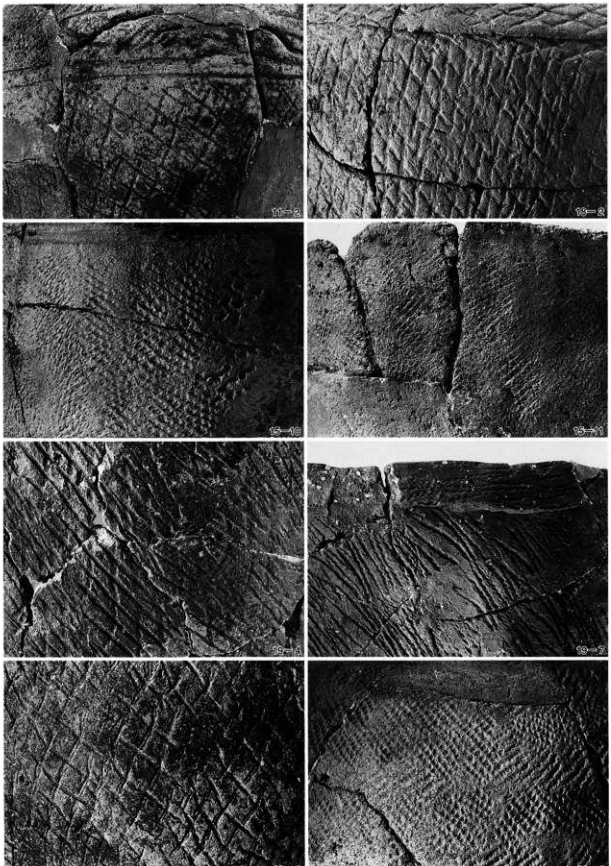
26－6

26－1

20　出土石器・石製品



21　土器細部（1）



22　上器細部（2）

報告書抄録

ふりがな	こまちだむいせきはっくつちょうさほうこく
書名	こまちダム遺跡調査報告4
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第431集
編著者名	山元 出
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査課 〒960-8116 福島県福島市春日町5－54 ℡024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2－16 ℡024－521－1111
発行年月日	2006年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	東経 °′″	北緯 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
沢目木B	ふくしまけんかしまぐんかしままち 福島県田村郡 小野町大字飯豊田 字沢目木	522	00146	140° 34′ 46″	37° 16′ 54″	2005年4月13日 ～ 2005年7月1日	1,100㎡	ダム（こまちダム）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沢目木B	集落跡	縄文	道構包含層（1）	縄文土器 土製品 石器 石製品	縄文時代晩期中葉大洞C2式期の土器捨て場を検出した。

経緯度の数値は世界測地系による

福島県文化財調査報告書第431集

こまちダム遺跡発掘調査報告4

沢目木B遺跡

平成18年3月29日発行

編集　財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査課

発行　福島県教育委員会　（〒960－8688）福島市杉妻町2－16

財団法人福島県文化振興事業団　（〒960－8116）福島市春日町2　54

福島県土木部　（〒960－8070）福島市杉妻町2－16

印刷　キング印刷株式会社　（〒960－1106）福島市下鳥渡字新町西6－1